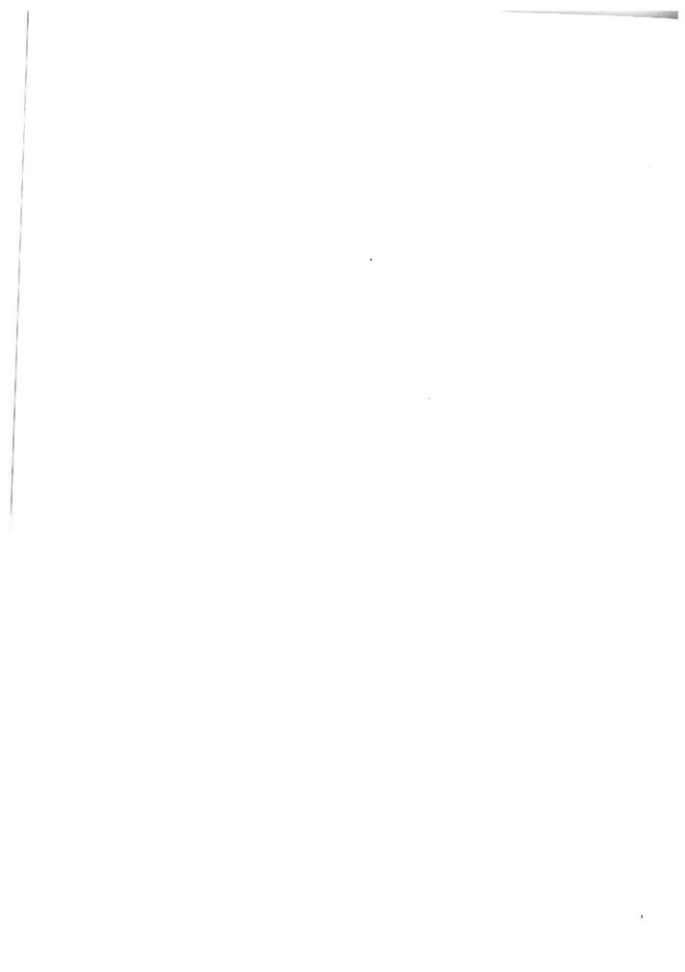


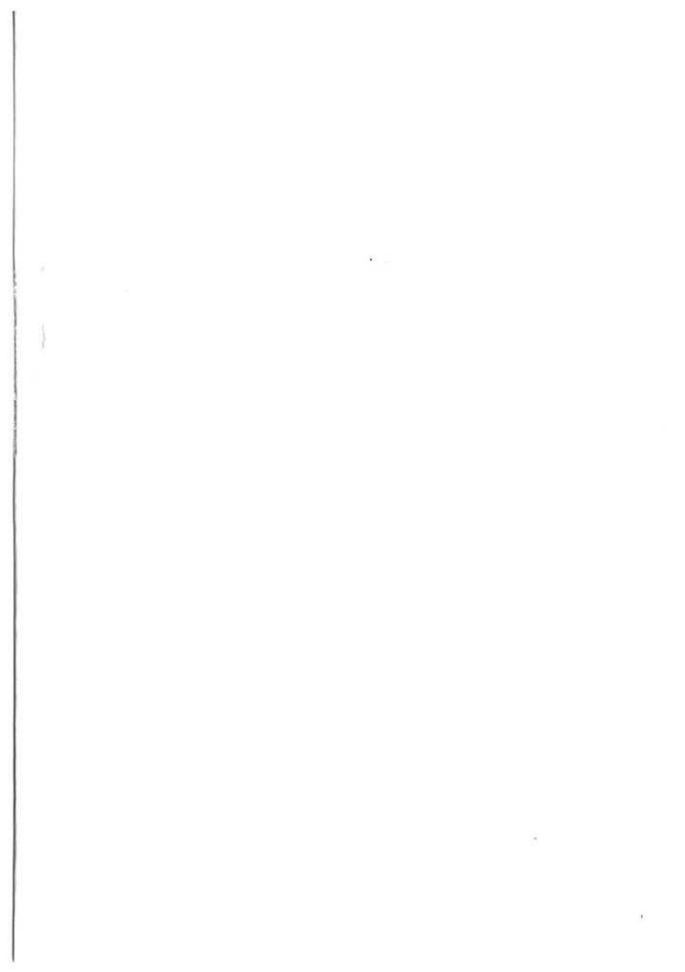
埼玉県戸田市遺跡調査会報告書 第3集

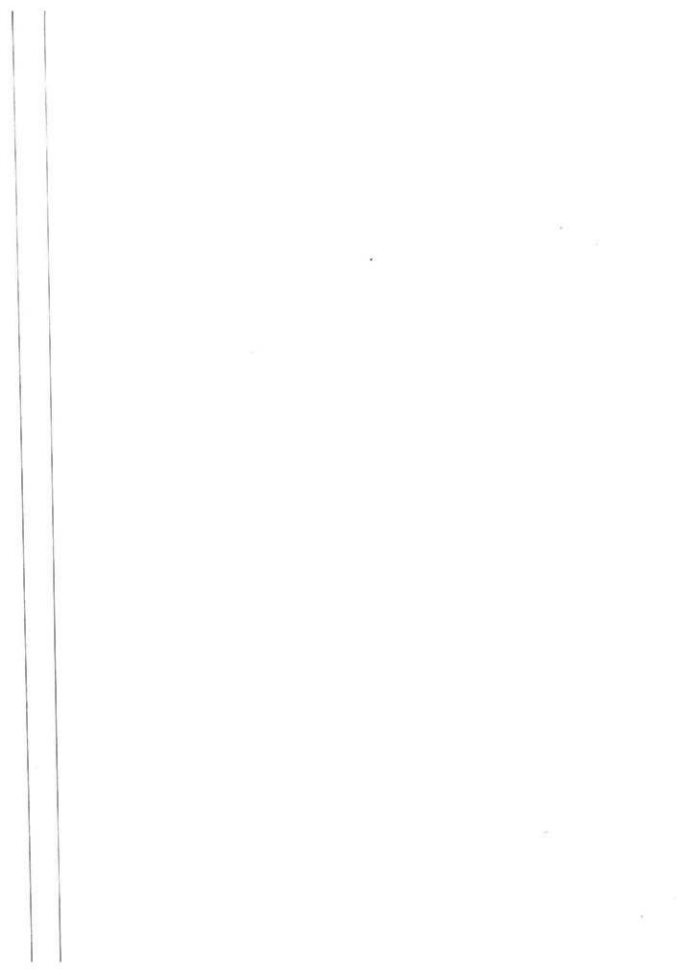
南 原 遺 跡 V

1 9 9 1

戸 田 市 遺 跡 調 査 会







埼玉県戸田市遺跡調査会報告書 第3集

みなみ はら
南 原 遺 跡 V

1 9 9 1

戸田市遺跡調査会

は　じ　め　に

戸田市遺跡調査会会長　奥　墨　修　一

戸田市は埼京線の開通に伴い、開発が盛んになり街の景観が著しく変化してまいりました。

本書は、このような都市開発の中で、文化財の保護を目的として、緊急に発掘調査された「南原遺跡」の記録です。

南原遺跡は、荒川の溢流によって形成された自然堤防の南端にあり、鍛冶谷・新田口遺跡とともに戸田市を代表する遺跡です。昭和46年に初めて調査が行われてから、今年で20年を経過しました。第2次調査の地点では、古墳から人物埴輪（頭部）も出土し、荒川下流域にあっては貴重な遺跡の1つとなっています。

今回の発掘調査で第5次を数え、集落の東側の一部分ではありますが、古墳時代前期の住居跡や中世の堀等々が検出され、多くの成果を得ることができました。本書を埋蔵文化財の保護と普及活用の資料として、また学術研究の基礎資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後となりましたが、本発掘調査に対し多大な御理解と御協力を賜りました熊木明子様、そして、直接に発掘調査現場で御協力をいただきました参加者の皆様方に深く感謝を申し上げます、あいさつといたします。

例 言

- 1 本書は、埼玉県戸田市南町2,270番地の共同住宅建設工事に伴って発掘調査された南原遺跡第5次調査の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査事業及び整理事業は、共同住宅建設の事業者である熊木明子（戸田市本町3丁目5番7号）から、戸田市遺跡調査会が委託を受けて実施したものである。
- 3 発掘調査、平成元年6月26日から9月7日にわたって行った。また、整理作業は平成元年10月11日から平成2年7月18日まで行った。
- 4 発掘調査は別表に掲げた調査組織により実施した。
発掘担当者 小 島 清 一（戸田市教育委員会 社会教育課）
- 5 出土品の整理及び図版の作成は、発掘担当者の指導により中山浩彦、香林勉を中心として整理参加者全員で行った。
- 6 本書の編集及び執筆は、小島清一が行った。
- 7 発掘調査から報告書を作成するまでの過程で、下記の方々から御教示、御協力を賜った。記して謝意を表したい。

浅野晴樹 岡田賢治 塩野 博 野村博英 長谷川誠 横山松太郎 村上義彦 伊藤和彦
佐藤勝巳 渡辺咲子 井沢洋子 立教高等学校生徒 27名 埼玉県立南稜高等学校生徒 28名
戸田市消防本部 戸田市立郷土博物館 戸田市遺跡調査協力会

- 8 発掘調査及び整理参加者は、下記のとおりである。

五十嵐 紀志子	五十嵐 理 恵	五十嵐 智 啓	上 原 勇	榎 本 真由美
大 川 佳 枝	岡 崎 久 子	香 林 勉	佐 藤 啓 子	佐 藤 正 浩
佐々木 文 子	関 徳太郎	高 橋 富士子	高 松 国 光	長 瀬 麻 子
長 峰 律 子	中 山 浩 彦	林 佐江子	広 瀬 幸 子	森 愛 子
八木橋 美知子	吉 田 シ ッ	和 田 良 子	渡 辺 咲 子	渡 辺 豊 子

目 次

はじめに

戸田市遺跡調査会会長

奥 墨 修 一

例 言

凡 例

1	発掘調査に至るまでの経過	1
2	発掘調査の経過	1
3	南原遺跡の立地と環境	3
4	南原遺跡の概観	5
5	遺構と出土遺物	11
(1)	住居跡と出土遺物	11
(2)	土塹と出土遺物	55
(3)	溝と出土遺物	59
(4)	堀と出土遺物	66
(5)	その他の遺構と出土遺物	74
(6)	グリッド出土の遺物	77
6	結 語	79
(1)	古墳時代前期の住居跡について	79
(2)	中世の遺構について	81

挿 図 目 次

第1図	南原遺跡V及び周辺の遺跡位置図	3
第2図	南原遺跡調査地位位置図	5
第3図	基本土層図	7
第4図	南原遺跡V遺構配置図	9
第5図	第1号住居跡実測図	11
第6図	第1号住居跡遺物出土位置図	12
第7図	第1号住居跡出土遺物接合図	13
第8図	第1号住居跡出土遺物実測図	13
第9図	第2号住居跡実測図	15
第10図	第2号住居跡遺物出土位置図及び接合図	16
第11図	第2号住居跡遺物出土状況図	16
第12図	第2号住居跡出土遺物実測図	17
第13図	第3号住居跡実測図及び遺物出土位置図	20
第14図	第4・5号住居跡実測図	21
第15図	第4・5号住居跡遺物出土位置図及び接合図	22
第16図	第4号住居跡出土遺物実測図	23
第17図	第5号住居跡出土遺物実測図	24
第18図	第6号住居跡実測図及び出土遺物接合図	25
第19図	第6号住居跡出土遺物実測図	26
第20図	第7号住居跡実測図及び出土遺物接合図	27
第21図	第7号住居跡出土遺物実測図	28
第22図	第8号住居跡実測図	29
第23図	第8号住居跡遺物出土位置図	30
第24図	第8号住居跡出土遺物実測図(1)	31
第25図	第8号住居跡出土遺物実測図(2)	32
第26図	第8号住居跡出土遺物実測図(3)	33
第27図	第8号住居跡遺物出土状況図	33
第28図	第8号住居跡出土遺物接合図	33
第29図	第9号住居跡実測図	36
第30図	第9号住居跡遺物出土位置図	37
第31図	第9号住居跡出土遺物接合図	38

第32図	第9号住居跡出土遺物実測図(1)	38
第33図	第9号住居跡出土遺物実測図(2)	39
第34図	第10号住居跡実測図及び遺物出土位置図	43
第35図	第10号住居跡出土遺物実測図	44
第36図	第11号住居跡実測図	45
第37図	第6・7・11号住居跡遺物出土位置図	47
第38図	第11号住居跡出土遺物接合図	48
第39図	第11号住居跡出土遺物実測図(1)	49
第40図	第11号住居跡出土遺物実測図(2)	50
第41図	第1号土塙実測図	55
第42図	第2号土塙実測図	55
第43図	第2号土塙遺物出土位置図(1)	56
第44図	第2号土塙遺物出土位置図(2)	56
第45図	第2号土塙出土遺物実測図	56
第46図	第3号土塙実測図	58
第47図	第1号溝出土遺物実測図	58
第48図	第1号溝・第3号堀実測図	59
第49図	第2号溝実測図及び遺物出土位置図・接合図	60
第50図	第2号溝出土遺物実測図	60
第51図	第2号溝出土ガラス小玉実測図	62
第52図	第3号溝実測図及び遺物出土位置図	62
第53図	第4・5・6号溝・第2号ビット群実測図及び遺物出土位置図	63
第54図	第4号溝出土遺物実測図	64
第55図	第1・2号堀実測図(1)	65
第56図	第1・2号堀実測図(2)	66
第57図	第1号堀出土遺物実測図	67
第58図	第2号堀出土遺物実測図	69
第59図	第2号堀出土板石塔婆拓影図	69
第60図	第3号堀出土遺物実測図	71
第61図	第1号ビット群実測図	74
第62図	第3号ビット群実測図	74
第63図	グリッド出土遺物実測図	77
第64図	住居跡比較図	80

表 目 次

第1表	第1号住居跡出土遺物	14
第2表	第2号住居跡出土遺物(1)	18
第3表	第2号住居跡出土遺物(2)	19
第4表	第4号住居跡出土遺物(1)	23
第5表	第4号住居跡出土遺物(2)	24
第6表	第5号住居跡出土遺物	25
第7表	第6号住居跡出土遺物	26
第8表	第7号住居跡出土遺物(1)	28
第9表	第7号住居跡出土遺物(2)	29
第10表	第8号住居跡出土遺物(1)	31
第11表	第8号住居跡出土遺物(2)	34
第12表	第8号住居跡出土遺物(3)	35
第13表	第9号住居跡出土遺物(1)	40
第14表	第9号住居跡出土遺物(2)	41
第15表	第9号住居跡出土遺物(3)	42
第16表	第10号住居跡出土遺物	44
第17表	第11号住居跡出土遺物(1)	51
第18表	第11号住居跡出土遺物(2)	52
第19表	第11号住居跡出土遺物(3)	53
第20表	第11号住居跡出土遺物(4)	54
第21表	第2号土壇出土遺物	57
第22表	第1号溝出土遺物	58
第23表	第2号溝出土遺物	61
第24表	第2号溝出土ガラス小玉	62
第25表	第4号溝出土遺物	64
第26表	第1号堀出土遺物(1)	67
第27表	第1号堀出土遺物(2)	68
第28表	第2号堀出土板石塔婆	69
第29表	第2号堀出土遺物	70
第30表	第3号堀出土遺物(1)	72
第31表	第3号堀出土遺物(2)	73
第32表	ビット一覧表(1)	75
第33表	ビット一覧表(2)	76
第34表	グリッド出土遺物	78

図版目次

- | | | | |
|------|--|------|--|
| 図版1 | 南原遺跡Ⅴの位置(1)
調査区域全景(2) | 図版12 | 第3号堀(北から)(1)・(2) |
| 図版2 | 第1号住居跡(北から)(1)
第2号住居跡(北から)(2) | 図版13 | 第1号ビット群(1)
第2号ビット群(2) |
| 図版3 | 第1・2号住居跡土器出土状態(1)~(4)
第3号住居跡(東から)(5) | 図版14 | 第1号住居跡出土遺物(1)・(6)
第2号住居跡出土遺物(2)~(5) |
| 図版4 | 第4・5号住居跡(北から)(1)
第4・5号住居跡切り合い状態(2)
第4号住居跡土器出土状態(3) | 図版15 | 第2号住居跡出土遺物(1)・(2)
第4号住居跡出土遺物(3)・(4)
第6号住居跡出土遺物(6)
第7号住居跡出土遺物(5) |
| 図版5 | 第6・7・11号住居跡(西から)(1)
第11号住居跡土器出土状態(2)~(4)
第8号住居跡土器出土状態(5) | 図版16 | 第8号住居跡出土遺物(1)~(5) |
| 図版6 | 第8号住居跡(東から)(1)
第8号住居跡土器出土状態(2) | 図版17 | 第8号住居跡出土遺物(1)~(3)
第9号住居跡出土遺物(4)~(6) |
| 図版7 | 第9号住居跡(西から)(1)
第10号住居跡(南から)(2) | 図版18 | 第11号住居跡出土遺物(1)~(6) |
| 図版8 | 第1号溝(西から)(1)
第1号溝土層断面(2)
第2号溝(北から)(3)
第2号溝ガラス小玉出土地点(4) | 図版19 | 第11号住居跡出土遺物(1)~(4)
第2号土壇出土遺物(5)
第2号溝出土遺物(6)
第2号溝出土ガラス小玉(7)
第4号溝出土遺物(8) |
| 図版9 | 第3号溝(北から)(1)
第4・5・6号溝(東から)(2) | 図版20 | 第1号堀出土遺物(1)
第2号堀出土遺物(2) |
| 図版10 | 第1号土壇(1)
第2号土壇(2)
第3号土壇(3) | 図版21 | 第3号堀出土遺物(1)・(2) |
| 図版11 | 第1・2号堀(北から)(1)
第1号堀(2)
第2号堀(3)
第1・2号堀土層断面(4)
第2号堀板石塔婆出土状態(5) | 図版22 | 第1号堀出土遺物(1)・(5)・(6)
第2号堀出土遺物(2)・(3)・(7)
第3号堀出土遺物(4)・(8) |
| | | 図版23 | 遺構出土石器(1)
グリッド出土石鏃(2)
第2号堀出土板石塔婆(3)
グリッド出土遺物(4)~(6) |

発掘調査の組織

会 長	戸田市教育委員会教育長	岡 田 弘 (平成3年1月31日まで)
"	"	奥 墨 修 一 (平成3年2月1日から)
理 事 (会長代理)	戸田市教育委員会教育次長	青 木 健 二
理 事	戸田市文化財保護委員会委員	金 子 弘
"	"	萩 原 勝 明
"	戸田市開発部都市計画課課長	渡 辺 英 隆
"	戸田市開発部市街地開発課課長	熊 谷 清 志
"	戸田市建設部建築課課長	杉 浦 剛 男
"	戸田市教育委員会社会教育課課長	田 中 栄 八
監 事	戸田市社会教育委員会委員長	草 刈 栄 芳
"	戸田市郷土博物館館長	村 上 義 彦
事務局 長	戸田市教育委員会社会教育課課長	田 中 栄 八
事務局 員	戸田市教育委員会社会教育課課長補佐	秋 葉 茂 夫
"	" 社会教育係長	和 田 卓
"	" 社会教育課主任	篠 のり子
調 査 員	" 社会教育課学芸員	小 島 清 一

凡 例

- 本書に掲載した挿図の縮尺は、原則として遺構図1/80・1/40、遺物実測図1/4である。それ以外は、図に添えたスケールを参照されたい。
- 遺構・遺物図中の焼土、炭化物等の標示は次のとおりである。

	焼土		炭化物		攪乱		土器の赤彩部分
---	----	---	-----	---	----	---	---------

- 土器観察表における胎土の記号は、下記のとおりである。
A：石英、B：金雲母、C：斜長石、D：黒く光る石、E：赤色粒子、F：白色粒子、
G：褐色粒子、H：砂粒子
- 土層中の水系レベルは、すべて標高2.7mである。

1 発掘調査に至るまでの経過

昭和63年12月13日、戸田市本町3丁目5番7号の熊木明子氏（以下「事業者」という。）から、戸田市南町2,270番地に共同住宅建設の開発行為に伴う事前協議が開発担当所管課になされた。

戸田市では、昭和60年の埼京線の開通により共同住宅等の開発が進み、文化財の保護が急務となっている。このような状況において、戸田市教育委員会では、開発担当所管課との各種の協議を実施して文化財保護と開発事業との調整を図っている。

南原遺跡は、昭和44年に初めて調査が行われて以来、古墳時代の集落跡及び古墳跡が存在することが明らかになっている。

教育委員会では、当該地が南原遺跡に隣接するため、埋蔵文化財が存在する可能性が高いものと判断し、事業者に試掘調査を実施する旨通知をした。

試掘調査は、平成元年5月15日に実施した。結果、古墳時代前期の住居跡及び溝等の遺構や遺物が検出された。そこで、当該地には埋蔵文化財が存在する旨事業者に通知し、その取り扱いについて、教育委員会と事業者で協議が行った。遺跡の保存については、既に開発許可がなされ計画を変更することが不可能であることから、事前に記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

これをもって事業者からは、平成元年6月8日付で、文化財保護法第57条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘届が文化庁長官あて提出された。発掘調査に際し、教育委員会と事業者で協議を重ね、事業が緊急を要することを考慮し、戸田市遺跡調査会会長と事業者は平成元年6月8日に事業委託契約を締結し、調査は平成元年6月26日から開始することとなった。

戸田市遺跡調査会からは、文化財保護法第57条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査届が文化庁長官あて提出された。

なお、文化庁長官からは平成元年10月5日付、委保第5の996号をもって発掘届を受理した旨通知があった。

2 発掘調査の経過

南原遺跡の第5次発掘調査は、平成元年6月26日から9月7日まで実施した。準備段階を含めると約3ヶ月間である。季節は、梅雨そして盛夏という最も厳しい天候条件での調査であった。この厳しい条件下、予定期間内に調査を完了することができたのは、熱心な参加者の協力によるところが大きい。

以下、調査経過が5期に区分できるので整理しながら経過を見ていきたい。

（6月26日～7月4日）

6月26日早朝から表土掘削作業が始まる。掘削については、試掘調査の結果をもとに調査区南側から重機により遺構確認面である黄褐色土層まで慎重に行った。初日から住居跡と思われる遺構2ヶ所（第1・2号及び第4・5号住居跡）が姿を現し、中央には堀が縦断することが予想されるなど、保存状態が良好な様子を示していた。

(7月5日～7月12日)

表土が除去され、遺構確認作業に移行する。南側から丹念に遺構の精査を行った。この段階で明らかになった遺構は、住居跡9軒、土塙3基、溝6本、堀3本である。当初、第6・7・11号住居跡は第2層の暗褐色土層中より、壺、甕、器台等多量に出土しており、大型の住居跡の存在を想起させるものであった。

なお、基準点測量及びグリッドの設定は7月5・6日の2日間にわたり行った。

(7月13日～8月30日)

梅雨明け真近。遺構の調査を開始する。第1・2号住居跡から取り掛かり、住居跡の進行状況を見ながら溝や土塙の調査を並行して進めた。第6・7・11号住居跡については、土層が不鮮明なところを考慮し、単一遺構的に取り扱い出土遺物の分布図を作成しながら調査を進めた。結果的には、3軒の住居跡を検出したこととなった。また、7月31日には第2号溝から濃青色のガラス小玉が1点ではあるが出土し、思わぬ発見で、猛暑に疲れを表していた参加者の心を和らげた。

堀の調査は、8月20日から29日までの10日間で行った。なお、堀り下げにあたっては立教高等学校・南陵高等学校の生徒58名の助力によるところ多大で、一気に行うことができた。

各遺構調査については、断面図及び平面図を作成し、記録写真を残す作業を進行状況に応じて行った。

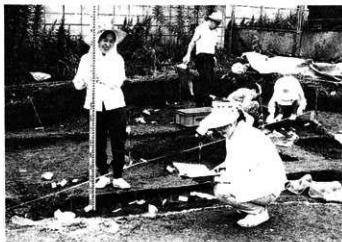
(8月31日から9月1日)

9月1日。遺構の全容を明らかにするため、前日から全員で清掃し、調査区全体の写真撮影を行った。写真撮影にあたっては戸田市消防本部の協力を得、「はしご車」及び「散水車」を動員していた。

(9月2日から9月7日)

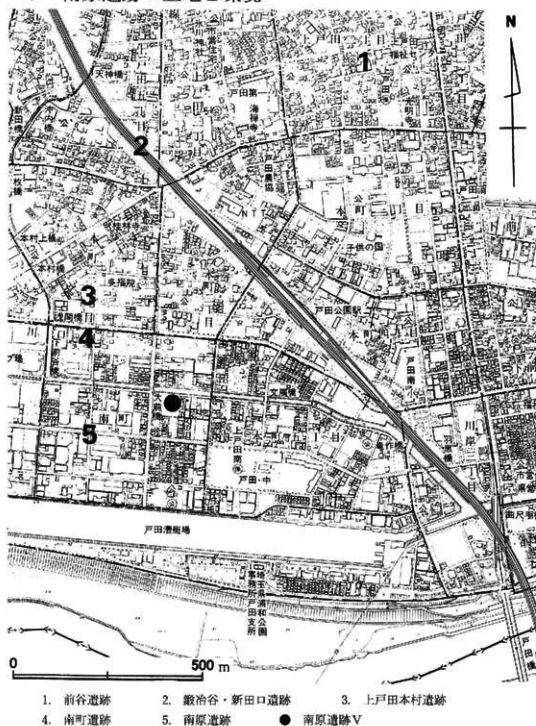
最終作業である検出された遺構の全体測量を行う。9月6日に作業を終え、9月7日には約2ヶ月半を過ごしたプレハブ内の資材を撤収し、現地における全ての作業を終了した。

調査日数53日、参加延べ人員558名であった。



発掘調査風景

3 南原遺跡の立地と環境



第1図 南原遺跡V及び周辺の遺跡位置図

南原遺跡Ⅴ（第5次調査）の調査地は、戸田市南町2,270番地に所在する。第1次から第4次調査の地点から東へ約200mの位置である。JR埼京線（昭和63年10月開業）の「戸田公園駅」より約600mのところ、さらに東には中山道が縦断し交通の利便性から共同住宅・倉庫等の開発の盛んな地域となっている。

戸田市は埼玉県の南端に位置し、東は川口市、北は浦和・蕨・さいたま市、西・南は荒川を境として朝霞・和光両市、そして東京都板橋区・北区と接している。面積は、18.11 ㎢である。東は中山道（国道17号）が、中央には東北・上越新幹線及び埼京線が、西には国道17号バイパスが縦断し、東京都へと通じている。かつて荒川には「戸田の渡し」や「早瀬の渡し」があって、北の玄関口として交通の要所となっていたところでもある。荒川は西部では北西から南東へ流れ、笹目付近で東へと方向を変え、南部ではほぼ東西に流路をとっている。

南原遺跡は、この荒川（旧入間川）の溢流によって形成された火山灰質の砂質粘土からなる黄褐色土層を基盤とする低平な自然堤防上の微高地の南端に位置する。標高は約5.0mを測り、比較的高低差の窺えるところとなっている。

本市における遺跡の大部分はこの南原遺跡の位置する自然堤防上に立地しており、北側を流れる菖蒲川を渡って北に連なっている。第1図は周辺の遺跡分布図である。本遺跡を含めて5ヶ所の遺跡が近在しており、いずれも弥生時代後期または古墳時代前期の集落跡をはじめとする遺跡である。本遺跡は№5である。以下、周辺遺跡の説明を加えたい。

№1は前谷遺跡で、昭和47年に発掘調査が行われており、弥生町期（弥生時代後期）及び五領期（古墳時代前期）の方形周溝墓各1基をはじめ、古墳時代や平安時代の溝、土壇、ピット群等の遺構や須恵器、土師器、灰釉陶器等の遺物が検出されている。特に灰釉陶器は、長頸壺・高台付皿・碗で愛知県猿投山南麓の古窯跡群で9世紀から11世紀にかけて生産されたものであることが確認されている。

№2は鍛冶谷・新田口遺跡で、埼玉県選定重要遺跡となっている。本市における遺跡発掘調査のはじめとなったところで、市においては5次にわたる調査が行われている。また、東北・上越新幹線及び埼京線の付設工事に伴って調査も行われており、弥生町期・前野町期から五領期の方形周溝墓群を主体とする大規模な集落跡であることが確認されている。現在までの調査の成果は、主な遺構として住居跡39軒、方形周溝墓103基を数えるものとなっており、各遺構が折り重なるように構築されている。出土品としても弥生時代後期から古墳時代前期の土器類や同時期の勾玉や管玉等の玉類、はしごや斧の柄等の木製品等々が検出されている。

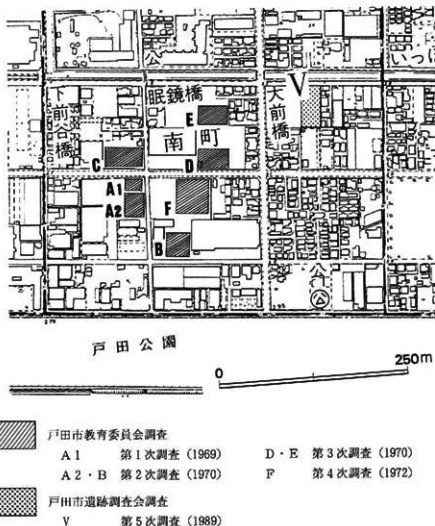
№3は上戸田本村遺跡である。昭和53年に市史編纂事業の一環として発掘調査を実施している。ここからは、五領期の方形周溝墓及び住居跡、鬼高期（古墳時代後期）の住居跡等が検出されている。なお、市内唯一残存（但し墳丘は開墾され原形をとどめていない。）の「くまん塚」古墳がこの地内にあり、直刀二振が出土している。

№4は南町遺跡である。この遺跡は昭和61年に共同住宅の開発に伴う事前調査として発掘調査されたもので、五領期的大型1基を含む2基の方形周溝墓とピットが検出されている。また、中・近世の板石塔婆や宝篋印塔の相輪等を出土している溝や土壇があり、当時の墳墓の存在の可能性が考えられる。

4 南原遺跡の概観

南原遺跡は、荒川（旧入間川）によって形成された自然堤防の南端に立地している。古墳時代前期をはじめとする集落跡及び古墳跡、さらに中・近世を通じて現在まで人々の生活が営まれている。とくに古墳時代後期における円形周溝墓や古墳跡は、荒川左岸流域にあっては最南端の古墳群として位置付けられるところである。

南原遺跡が所在する戸田市南町は、区画整理事業が早くから行われ、現在では住宅や倉庫が整然と立ち並び、景観は著しく変容している。標高は約5.0mを測り、平坦な戸田市にあっては比較的起伏の窺えるところで古くから『高知原（たかちげら）』と呼ばれており、また土器の散布地として知られ、遺跡の存在が予期されていたところである。



第2図 南原遺跡調査地位位置図

このような地であって、昭和44年から遺跡の性格を明らかにするため保存対策事業として年次計画に組み入れ、今まで4次にわたり発掘調査が行われている。調査においては、遺跡が広範囲にわたることを考慮し、調査が可能なところをA～Fの6地区に分けて実施している。第1次調査を昭和44年度（A1地区）、第2次調査を昭和45年度（A2地区・B地区）、第3次調査を昭和46年度（D・E地区）、第4次調査を昭和47年度（F地区）に実施している。これら4次にわたる調査によって、次のような時期の遺構が検出され遺跡の様子が明らかになっている（『戸田市史通史編上』）。

古墳時代前期前半（五領Ⅰ）	住居跡	4軒	（A地区）
古墳時代前期前半（五領Ⅱ）	方形周溝墓	7基	（A地区5・B地区1・D地区1）
古墳時代前期後半（和泉Ⅰ）	住居跡	3軒	（B地区）
古墳時代後期前半（鬼高Ⅰ）	円形周溝墓	3基	（A地区1・F地区2）
古墳時代後期後半（鬼高Ⅱ）	住居跡	1軒	（D地区）
古墳時代後期後半（鬼高Ⅱ）	炉跡	1基	（D地区）
古墳時代後期後半（7世紀）	円墳跡	1基	（A地区）
平安時代前半（10世紀）	堀立柱建物遺構・ビット群・土壇・堀・溝（ABDEF地区）		

このように、南原の地は集落跡として、あるいは墓域として4世紀頃から開け、人々の生活が営まれてきたことが窺える。

また、本遺跡の住居跡からは在地の土器には見られない、外来系（東海系）のものが出土していることが特筆できる。その土器はA地区から検出されており、焼失家屋である第3号住居跡の床面や貯蔵穴から炭火財とともに出土している。1点は、胴下半部が委った扁球状を呈し、内彎しながら長く伸びた口縁部を付けた長頸壺型土器である。もう1点は、「く」の字状に外反し二重口縁部をもつ壺型土器である。これらの土器は伊勢湾沿岸地域で盛行していたものの特徴を有しており、前者は愛知県の欠山遺跡出土の土器を標式とする「欠山式土器」で、後者は「石塚式土器」である。このように外の地域から流入してきた土器が検出されており、当時の人々の動きが窺える一端でもある。いずれにしても、荒川を主要河川とするこの地域においては畿内の北武蔵における東国進出の拠点的な位置に存在する遺跡としても受けとめることができよう。

第5次調査は、これまでの調査地点からは約200m程東に所在し、やや傾斜する自然堤防の縁辺付近に立地する。土層の堆積状況は第3図基本土層図のとおりである。第1層である表土層は、荒川の溢流によって堆積した灰褐色土である。第2・3層は遺物の包含層である暗褐色土。第4層は基盤層となる火山灰質の砂質粘土の黄褐色土層である。

発掘調査は重機により遺構確認面である第4層まで掘削を行い、遺構の調査を進めた。検出された遺構は住居跡11軒、土壇3基、溝6本、堀3本、ビット群3群である。

住居跡は古墳時代前期前半に位置付けられる五領Ⅰ式期10軒（第1～10号住居跡）、五領Ⅱ式期の住居跡1軒（第11号住居跡）である。第2・8・9号住居跡は床面から多量の炭化物が検出されており、焼失家屋の可能性が考えられる。

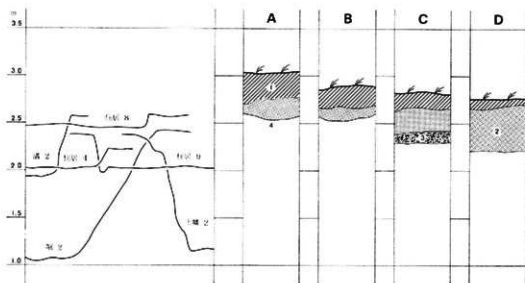
土壇は3基検出されている。第2号壇については出土遺物から古墳時代前期の所産であると考えられる。第1・3号土壇については遺物が皆無であるため時期が分からない。第1号土壇は形態から井

戸跡と思われる。

溝は6本検出されている。第2号溝を除いては、時期あるいは性格等不明な点が多い。第2号溝は全容が明らかでないため不明な点もあるが、土器やガラス小玉等の出土遺物から古墳時代前期前半の五領期の方形周溝墓とも考えられる。

堀は調査区の中央及び東部分に南北に縦断するように3本検出されている。3本ともV字形あるいはU字形を呈する薬研堀であり、僅かであるが出土遺物から中世に比定される時期のものである。

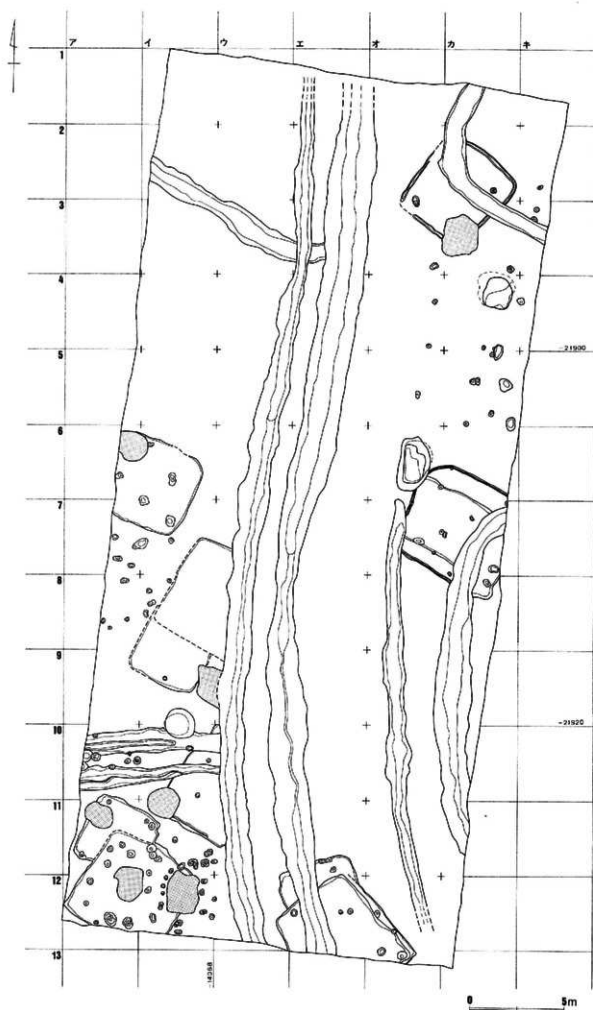
以上、第1次から第4次調査及び第5次調査における南原遺跡の概観である。



上 層 註

1. 灰褐色土 砂質。粘性、弱。しまり、なし。
2. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子、白色粘土粒子、白色粘土粒子を微量含む。粘性、弱。しまり、良。
3. 暗褐色土 第2層よりも含有物をやや多く含む。粘性、弱。しまり、良。
4. 黄褐色土 粘土質土層。含有物特になし。粘性、強。しまり、良。

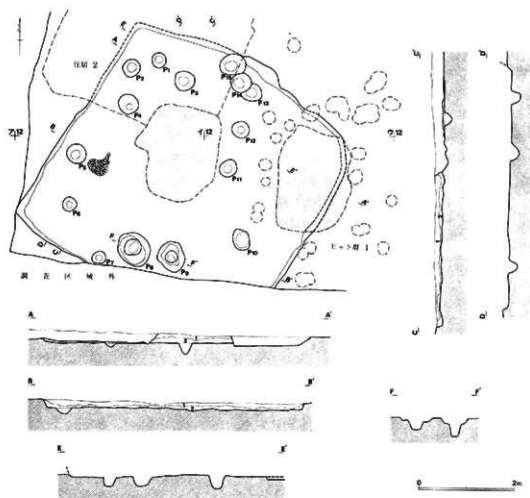
第3図 基 本 土 層 図



第4図 南原遺跡V遺構配置図

5 遺構と出土遺物

(1) 住居跡と出土遺物



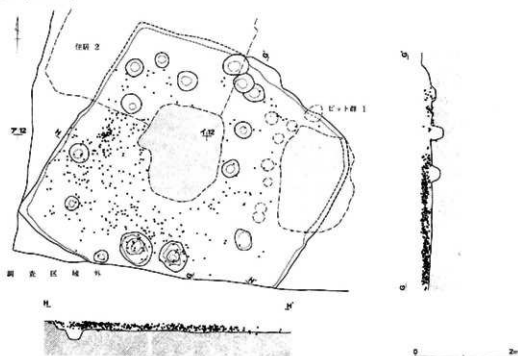
上層註

1. 黒褐色土 黄褐色粘土粒子を全体的に少量含む。粘性あり。しまり、良。
2. 黒褐色土 黄褐色粘土ブロックを多量に含む。粘性、強。しまり、良。

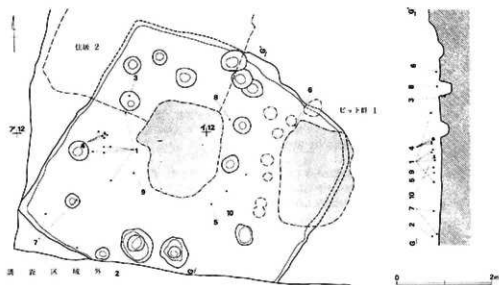
第5図 第1号住居跡実測図

第1号住居跡（第5・6・7図）

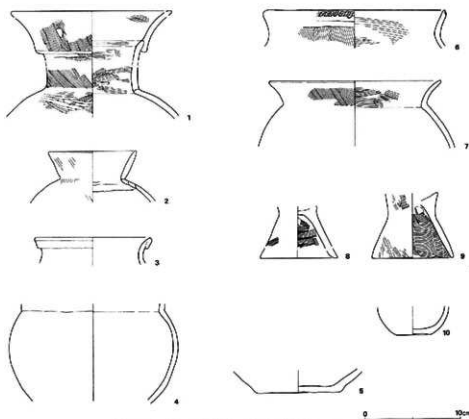
調査区の最南西端ア～イ11～12グリッドに位置する。南側が調査区域外となり、中央及び東側の一部に攪乱を受ける。北西部で第2号住居跡と切り合って構築されており、新旧関係は本跡のほうが古い。しかし第2号住居跡よりも本跡のほうが掘り込みが若干深いため、床面の状態は把握可能であった。規模は東西・南北ともに5.4mで、整った方形プランを呈するものと思われる。掘り込みは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は西側が若干高く東に向かってわずかに傾斜しているものの、ほぼ平坦である。西壁脇から焼土が検出されたが、炉跡としての掘り込みはそれ程明瞭ではない。ビッドは15箇所と多いが、東側の第1号ビッド群と重複しており、全てが本跡に属するものであるかどうかの明確な決め手に欠ける。P1は直径32cm、深さ16cm。P2は直径36cm、深さ12cm。P3は直径43cm、深さ18cm。P4は直径42cm、深さ17cm。P5は直径42cm、深さ20cm。P6は直径29cm、深さ17cm。P7は直径29cm、深さ17cm。P8は直径76cm、深さ22cm。P9は直径65cm、深さ36cm。P10は直径47cm、深さ28cm。P11は直径38cm、深さ16cm。P12は直径36cm、深さ26cm。P13は直径44cm、深さ10cm。P14は直径42cm、深さ14cm。P15は直径54cm、深さ19cmを開る。主柱穴はP1とP6の西側2本と、東の攪乱及び調査区域外に存在する可能性がある2本とで構成するものと思われる。遺物は423点が出上した。西側から南側にかけて多く分布し、特に焼土の周りは高密度である。なお、北西隅の遺物は、第2号住居跡の破壊を受けていない最下層部分のみを図示している。P2内部及び西側集束部分より、複合口縁を呈する壺形土器の口縁部（No.1, 3）が出上している。個体数が多いわりに小片が多かった。



第6図 第1号住居跡遺物出土位置図



第7図 第1号住居跡出土遺物接合図



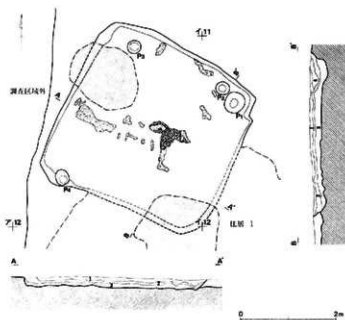
第8図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1表 第1号住居跡出土遺物 (第8図)

番号	器 種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
1	壺		複合口縁。頸部から直立し、段をもって大きく外反する。胴肩部が張る。内外面ともに刷毛整形。後、外周胴部は粗いヘラ磨き。頸部及び口縁部はナデ調整。内面、胴部はナデ調整。頸部は粗いヘラ磨きを加える。内外面とも赤彩の可能性有り。頸部40%残。	胎土 AEG酸F H少 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
2	壺	口径 (9.2)	頸部は小さくなり、「く」の字に屈曲する。内面にやわらかい段をもつ。口縁部は頸部から微妙に外反し外傾する。肩部は張りをもつようである。外面、刷毛整形後ナデ調整。端部に横ナデを加える。内面は、ナデ調整。肩部に輪積み痕を残す。口縁部90%残。	胎土 A酸、F G H少 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
3	広口壺	口径 (12.2)	緩やかに外反する口縁部。複合口縁を呈す。内外面ともにナデ調整。口縁部20%残。	胎土 F H少、G多 焼成 普通 色調 淡褐色	
4	広口壺	胴径 (17.6)	球形となる胴部。頸部の収縮は弱く、口縁部は直立する。頸部内面に段をもつ。内外面ともにナデ調整。胴部下半に黒斑あり。胴部30%残。	胎土 A酸、F H少 焼成 普通 色調 淡褐色	
5	壺	底径 (8.6)	平底の底部。内外面ともに摩滅著しく調整等不明瞭。内面にはナデ調整痕が残る。底部30%残。	胎土 A G酸、H多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
6	壺	口径 (19.0)	頸部は緩やかに屈曲し外反する。口縁部にハケ状工具により刻みを施す。外面は縦方向、内面横方向の刷毛整形。後、口縁端部に横ナデを加える。口縁部20%残。	胎土 F H少 焼成 普通 色調 淡橙褐色	
7	壺	口径 (18.0)	頸部が「く」の字状に屈曲し、緩やかに外反する口縁部。頸部内面に段をもつ。外面、刷毛整形後、胴部はナデ調整。内面、胴部はナデ調整。口縁部は横方向のハケ整形。内外面ともに口縁端部に横ナデを加える。口縁部10%残。	胎土 H酸、E F少 焼成 普通 色調 暗橙褐色	
8	台付甕		直線的に開く脚台部。外面、ナデ調整。細かい刷毛目が残る。内面、刷毛整形。脚台部30%残。	胎土 F G H少 焼成 普通 色調 赤褐色	
9	台付甕	脚径 (8.4)	微妙に内彎しながら開く脚台部。端部は平坦となる。外面、摩滅のため不明瞭であるが、刷毛目が残る。内面、刷毛整形。天井部に指頭圧痕。脚台部50%残。	胎土 A酸、G H少 焼成 やや不良 色調 淡褐色	
10	埴	底径 (4.0)	平底の底部。外面、丁寧なヘラ削り。内面、ナデ調整。底部60%残。	胎土 G酸、F H少 焼成 普通 色調 淡褐色	

第2号住居跡（第9・10・11図）

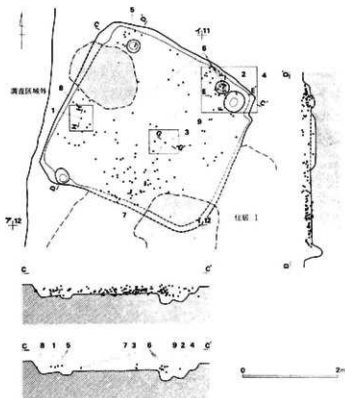
調査区南西部ア〜イ-11グリッドに位置する。南東隅及び西側に攪乱を受け、南東部で第1号住居跡と切り合って構築されている。本跡のほうが新しい。規模は東西3.7m、南北3.6mで整った方形プランを呈する。壁は深さ20cm前後で、若干の傾斜をもって掘り込まれている。床面は、南東部の攪乱を受けた周囲で落ち込みがみられ、また北東部が若干深く掘り込まれているものの、ほぼ平坦である。南隅・東隅を除くほぼ全面から炭火物が出土し、第2層はその影響を受けて炭化粒子が多く含まれている。更に中央床面に継続加熱を思わせる所があり炉床とも考えられたが、明確な掘り込みがなく炉床ではなさそうである。ピットは4本検出され、P2・P3・P4は主柱穴を構成する。P1は直径45cm、深さ20cm。P2は直径30cm、深さ23cm。P3は直径27cm、深さ7cm。P4は直径32cm、深さ20cmを測る。P1は完形の壺形土器のほか土器片が出土しており、貯蔵穴であったと思われる。遺物は151点出土、北東隅と南側に集中箇所が見られる。西壁脇と中央部及びP1の中から、ほぼ完形に近い壺形土器が3点（No.1, 3, 4）出土している。他に北西壁際から台付壺形土器（No.5）、西壁際から埴形土器（No.8）、北東隅からは器台（No.9）がそれぞれ1点ずつほぼ完形で出土した。



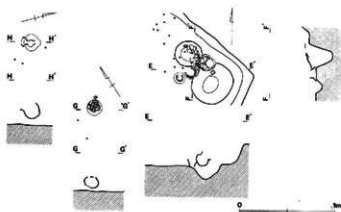
土 層 註

1. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子を少量含む。粘性、ややあり。しまり、良。
2. 暗褐色土 黄褐色粘度粒子を少量含む、炭化物を含む。粘性、ややあり。しまり、良。
3. 黒褐色土 黄褐色粘土ブロックを多量に含む。焼土粒子を多く含む。粘性、あり。しまり、良。
4. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子、同ブロックを少量含む。粘性、あり。しまり、良。

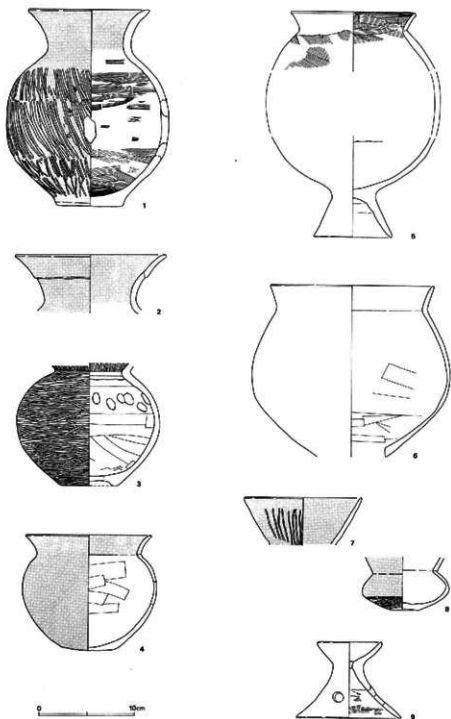
第9図 第2号住居跡実測図



第10図 第2号住居跡遺物出土位置図及び接合図



第11図 第2号住居跡遺物出土状況図



第12図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2表 第2号住居跡出土遺物 (1) (第12図)

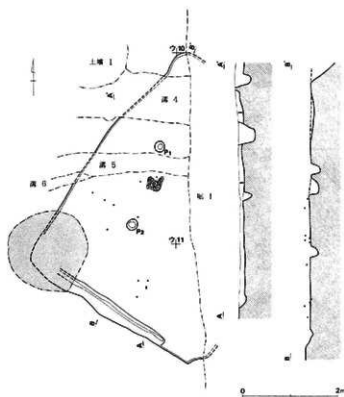
番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	口径 (13.2) 胴径 17.2 底径 7.2 器高 20.7	胴部中位に最大径をもつ球形を呈す。肩部から頸部は緩やかにカーブし、口縁部は漏斗状に大きく開く。胴部に外からの力により穿孔あり。外面、肩部から底部付近まで刷毛整形後、4分割し縦方向のヘラ磨きを施す。内面、胴部上位から中位にかけて細かい刷毛整形後ナデ調整。下位は粗い刷毛整形。上位と下位に輪痕み痕を残す。外面及び口縁部内面を赤彩。胴部内面の下位に直径約8cmの円形の黒斑、外面同位置に輪状の黒げが付着している。残存90%。頸部以下完存、口縁部40%残。	胎土 A少、GH多 焼成 やや不良 色調 淡褐色	
2	壺	口径 (15.9)	複合口縁を呈す。内外面ともにナデ調整後、赤彩。口縁部から頸部50%残。	胎土 E H微 焼成 やや不良 色調 淡褐色	
3	壺	胴径 15.6 底径 (6.0)	胴部最大径を中位にもつ偏球状を呈す。口縁部欠損。底部の大部分が剥落する。外面、頸部の上半は縦方向、胴部は横方向の丁寧なヘラ磨き。内面、頸部の上半は縦方向のヘラ磨き、胴部はヘラナデ、底部は木口状工具によるナデ調整を施す。調整。肩部には指痕圧痕も見られる。外面全体、内面口縁部を赤彩。外面胴部下半に13×8cm程の大きな黒斑あり。残存90%	胎土 B E微、A F少 G多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
4	広口壺	口径 13.2 胴径 14.0 底径 5.7 器高 12.1	胴部やや上位に最大径をもつ。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反する。内面に稜をもつ。底部はやや膨らむ平底である。外面口縁部横方向のナデ、胴部は刷毛整形後ナデ調整。内面口縁部は横方向のナデ、胴部はヘラナデ調整。外面に赤彩痕。内面に炭付着。残存95%	胎土 F H多 焼成 やや不良 色調 淡褐色	
5	台付甕	口径 (13.2) 胴径 (8.2)	頸部は緩やかに屈曲し、短かく外傾する。胴部は肩の張り強いが、球形を呈す。脚台部は直線的に開く。外面、刷毛整形後ナデ調整。胴上半部に刷毛目を残す。内面はナデ調整。口縁部は横方向の刷毛整形。脚台部内面は刷毛整形後ナデ調整。輪痕痕を残す。胴中央部及び上半部に煤が付着する。残存30%。口縁部は30%残。	胎土 F H少、G多 焼成 やや不良 色調 暗橙褐色	
6	台付甕	口径 (17.2) 胴径 (20.8)	頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。胴部は最大径を中心にもつが、肩部の張りは弱く胴下半部も直線的である。脚台部を欠損するが、現存の胴最下端部には脚台部との接合痕を残す。器表面の摩滅、剥落が著しく調整等わかりにくい。胴部内面にヘラナデ調整を施す。内外面ともに、煤が付着する。口縁部から胴部30%残。	胎土 E 微 焼成 普通 色調 淡橙褐色	

第3表 第2号住居跡出土遺物 (2)

番号	器 種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
7	埴	口径 (12.4)	微妙に内彎しながら開く口縁部。外面、ナデ調整のも縦方向のへら磨き、端部は横方向のナデ調整が施される。内面、ナデ調整、端部は横方向のナデ調整。内外面ともに赤彩。口縁部15%残。	胎土 A 散、E 少 焼成 良好 色調 暗赤褐色	
8	埴	胴径 9.1 底径 2.9	口縁部は直線的に立ち上がり開く。胴部は強く張り、ソロバン玉状を呈す。頸部内面の稜は鋭い。底部は小さく上げ底状となる。胴部外面に刷毛目が残るが、後ナデ調整が加えられる。他の部分もナデ調整。外面を赤彩。残存80%残。胴部はほぼ完存。	胎土 A 散、E 少 焼成 普通 色調 淡褐色	
9	器 台	口径 6.8 脚径 11.0 器高 8.0	受部は浅く、内彎ぎみに開き、口唇端部は丸く尖る。貫通孔をもつ。脚部は緩やかに外反して開く。脚部中位に円孔を3箇所有する。脚部内面を刷毛整形後ナデ調整。他は器表面の摩滅が著しく詳細はわからないが、ナデ調整が施されるものと思われる。内外面ともに赤彩の可能性あり。口縁部、裾端部を若干欠損するが、ほぼ完存。	胎土 A 散、E 少 焼成 普通 色調 淡橙褐色	

第3号住居跡（第13図）

調査区南西部イ〜ウー10〜11グリッドに位置する。南西隅に攪乱を受け、また東半分を第1号堀に、北側を第4・5・6号溝に破壊されている。大半が破壊を受けているが、二隅と主要二穴を確認できたことにより、規模・構造ともに推定が可能である。規模は南北5.6m、東西4.4mで、コーナーに丸味を帯びる方形でプランを呈するものと思われる。掘り込みは10cm前後と浅く、ややゆるやかに立ち上がる。床面は、部分的に凹凸があるが、ほぼ平坦である。南壁際に幅20cm、深さ5cm程の壁溝が巡るが、西端は攪乱を受け不明である。中央付近に灰皿が検出されるものの、若干の掘り込みが認められたにすぎない。ピットは2箇所確認されている。ともに支柱穴を構成する。P1は直径22cm、深さ20cm。P2は直径24cm、深さ17cmを測る。遺物は13点と極めて少なく、いずれも小片のみで図示し得るものはない。



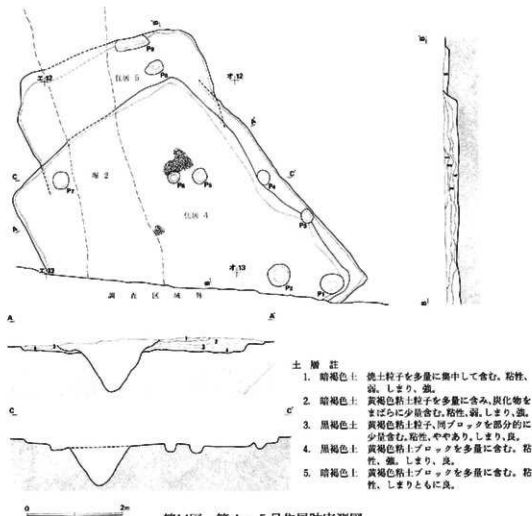
土層註

1. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子を多量に含み、炭化物を微量含む。粘性、あり。しまり、良。

第13図 第3号住居跡実測図及び遺物出土位置図

第4号住居跡（第14・15図）

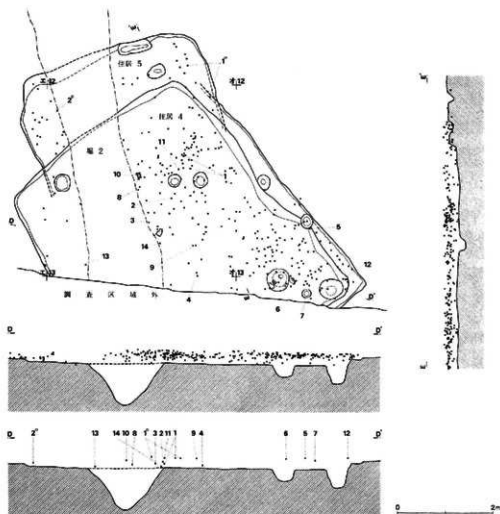
調査区の南東端付近ウーオー11～13グリッドに位置する。北に隣接する第5号住居跡より後出するが、西側中央を第2号堀に破壊されており、また南側は調査区域外となる。南辺と東辺のみを若干広げた拡張住居跡のようである。周囲はテラスのような状態で機能していたと考えられる。規模は東西5.1m、南北6.0mで、コーナー部がほぼ直角な長方形プランを呈する。掘り込みは30cm前後で、ややゆるやかに立ち上がる。床面は、西壁際が若干高くなるが、ほぼ平坦である。北東部から焼土が検出されるが掘り込みはほとんどない。ピットは7本検出された。P1は直径49cm、深さ38cm。P2は直径47cm、深さ26cm。P3は直径30cm、深さ16cm。P4は直径32cm、深さ13cm。P5は直径32cm、深さ13cm。P6は直径28cm、深さ15cm。P7は直径38cm、深さ7cmを測る。P5・P6のどちらかが第5号住居跡の主柱穴かと思われたが、P8の底のレベルが第4号住居跡の床面より高い位置にあるため、その可能性は薄い。遺物は268点出土し、西側及び拡張部分を除くほぼ全面に分布している。主なものとしては、中央堀際より埴形土器（No.10）が出土した。



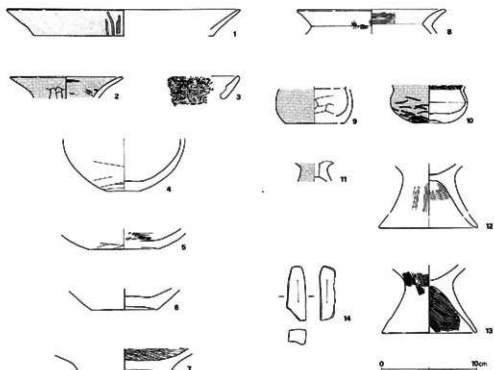
第14図 第4・5号住居跡実測図

第5号住居跡（第14・15図）

調査区の南東部ウ～エー11～12グリッドに位置する。南側大部分を第4号住居跡に、残りの西側も第2号堀に破壊されており、全容は不明な点も多い。規模は東西4.0mで若干胴が張りコーナーにやや丸味をもつ方形プランを呈するものと思われる。堀り込みは10cm前後と浅く、ゆるやかに立ち上がる。床面は西側が若干低いものはほぼ平坦である。ピットは2箇所検出された。P 8は直径38cm、深さ11cm。P 9は直径70cm、短径26cm、深さ13cmを測る。遺物は35点と少なく、小片ばかりである。複合口縁を呈する壺形土器（No 1）が東壁際より出土している。



第15図 第4・5号住居跡遺物出土位置図及び接合図



第16図 第4号住居跡出土遺物実測図

第4表 第4号住居跡出土遺物 (1) (第16図)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	口徑 (24.6)	複合口縁の複合部。外面、入念な横ナデ調整後ヘラ磨き。内面は剥落のため、調整は不明瞭。外面を赤彩。口縁部10%残。	胎土 H少 焼成 普通 色調 淡橙褐色	
2	壺	口徑 (11.8)	単純口縁。頸部は緩やかに外反する。外面、ヘラ削り後ナデ調整。内面、刷毛整形後ナデ調整。内外面ともに赤彩。口縁部15%残。	胎土 H微、A少 焼成 良好 色調 淡褐色	
3	壺		複合口縁部の破片。外面、ナデ調整後LRの斜縄文、その下に列点文を施す。端部にLRの縄文。内面はナデ調整。内外面ともに赤彩。	胎土 H微 焼成 良好 色調 淡褐色	
4	壺	底径 3.4	底部から丸く球形状となる胴部。底部は削り出し平面をつくる。小さい平底。外面、粗いヘラ削り後ナデ調整。内面、ナデ調整。底部を中心に大きく風乾が見られる。胴下半部40%残。底部は完存。	胎土 H微、A少 焼成 良好 色調 暗褐色	
5	壺	底径 (7.4)	底部から緩やかに内彎する胴下半部。底部は僅かに上げ底状となる。外面、部分的なヘラ削り後ナデ調整。内面、刷毛整形後ナデ調整。底部20%残。	胎土 H微、A少 焼成 普通 色調 淡橙褐色	

第5表 第4号住居跡出土遺物 (2)

番号	器 種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
6	壺	底径 6.8	上げ底状を呈する底部。底部から緩やかに内凹するように立ち上がる。内外面ともにナデ調整。外面に黒斑あり。底部のみ完存。	胎土 A F散 焼成 普通 色調 淡褐色	
7	壺	底径 9.6	上げ底状を呈する大型の底部。内面、丁寧なヘラ磨きが施される。外面は摩滅のため調整等不明。底部のみ完存。	胎土 H散、A少 焼成 やや不良 色調 淡褐色	
8	甕	口径 (15.6)	「く」の字状に屈曲する頸部。口縁部は短かく外反する。頸部内面に稜をもつ。外面、刷毛整後ナデ調整。内面、口縁部は刷毛整形後、端部を横ナデ調整。口縁部10%残。	胎土 A E H散 焼成 普通 色調 淡黒褐色	
9	埴	胴径 (8.0) 底径 (6.2)	中央部が優る偏平な胴部。外面、ナデ調整。内面、ヘラナデ後ナデ調整。外面には赤彩痕が認められる。部分的に黒斑有り。胴部10%残。	胎土 A散 焼成 良好 色調 淡褐色	
10	埴	胴径 8.0 底径 2.9	胴部中位が強く優る偏球状を呈す。底部は小さく、上げ底状となる。外面、ナデ調整後ヘラ磨き。内面はナデ調整、頸部に刷毛目を残す。外面及び内面頸部を赤彩。底部はヘラ状工具により快り取ったようである。胴部外面に黒斑が2箇所見られる。胴部90%残。	胎土 E散、A少 焼成 普通 色調 淡褐色	
11	器 台		貫通孔を有する接合部。外面、ナデ調整後赤彩。内面、ナデ調整。接合部のみ完存。	胎土 A H少 焼成 良好 色調 暗灰褐色	
12	台付甕		直線的に開く脚台部。外面、摩滅のため詳細は不明瞭であるが、刷毛整形後ナデ調整が行われている。内面はナデ調整、部分的に刷毛目が残る。胴部内面、木口状工具によるナデ後ナデ調整。脚台部60%残。	胎土 G H散 焼成 普通 色調 茶褐色	
13	台付甕	脚径 (10.6)	直線的に広がる脚台部。外面、接合部は刷毛整形、脚部はナデ調整が施される。内面、丁寧な刷毛整形、胴部内面はナデ調整。脚台部30%残。	胎土 G H散 焼成 普通 色調 暗赤褐色	
14	砥石力	長さ (5.7) 幅 1.8 厚さ (1.5) 重さ 23g	前面及び右側面に砥ぎ面をもつ。後面と左側面を欠損、原型はつかめない。	石質 砂岩 色調 黄赤褐色	



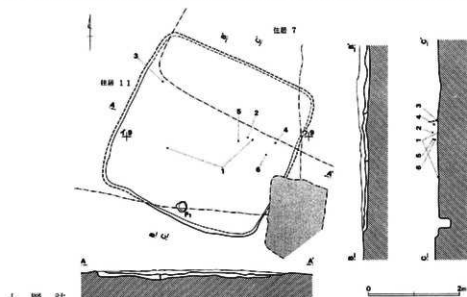
第17図 第5号住居跡出土遺物実測図

第6表 第5号住居跡出土遺物 (第17図)

番号	器 種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・旋成・色調	備 考
1	壺	口径 (14.4)	頸部から直線的に外傾し、さらに上部で外反する口縁部。端部は折り返えようになる。外面、横方向の刷毛後ナデ調整。内面は丁寧なナデ調整。図下端の接合部に刷毛目が残る。口縁部20%残。	胎土 ABH微 旋成 良好 色調 茶褐色	
2	台付甕		直線的に開く脚台部及び接合部。外面、ヘラ削り後ナデ調整。内面、ナデ調整。接合部30%残。	胎土 AH微 旋成 良好 色調 淡褐色	

第6号住居跡 (第18図)

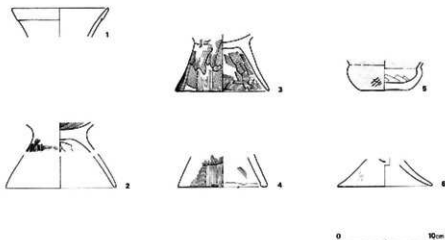
調査区中央西側ア～イー8～9グリッドに位置する。東側一部に攪乱を受け、また北側1/3を第7号住居跡と切り合うが、本跡のほうが古い。更にはほぼ全域にわたり上層部を第11号住居跡に破壊されている。規模は東西3.8mで若干コーナーに丸味をもつ整った方形プランを呈するものと思われる。壁際の堀り込みは10cm余りと浅く、更に上層が第11号住居跡の破壊を受けているため、本跡に相当する覆土は10cm足らずである。床面は若干の凹凸はあるもののほぼ平坦である。ピットは1箇所のみである。規模は直径25cm、深さ25cmである。遺物状況について小片の遺物は、本跡・第7号・第11号住居跡と遺構ごとに分類するのは困難なため、図示可能な遺物についてのみ記した。中央付近より埴形土器 (No.5) が出土している。なお、本跡に該当する遺物はおおよそ100点余りとみている。



土 層 註

1. 暗褐色土: 黄褐色粘土粒子、同ブロックを多量に含む。粘性、強。しまり、良。

第18図 第6号住居跡実測図及び出土遺物接合図



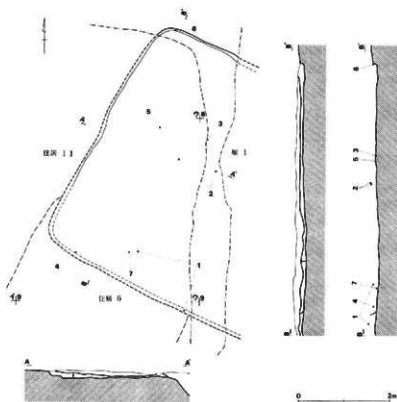
第19図 第6号住居跡出土遺物実測図

第7表 第6号住居跡出土遺物 (第19図)

番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	壺	口径 (10.2)	緩やかに外反しながら開く口縁部。複合口縁を呈す。内外面ともに摩滅著しく調整等不明。口縁部10%残。	胎土 A微、F GH少 焼成 不良 色調 淡橙褐色	
2	台付甕		接合部。外面、刷毛整形後ナデ調整。内面、甕部は細かい刷毛整形。脚台部は木口状工具によるナデ後ナデ調整。接合部90%残。	胎土 A微、F GH少 焼成 普通 色調 暗橙褐色	
3	台付甕	脚径 (9.4)	直線的に開く脚台部。端部は平矩となり、内面に粘土がはみ出す。外面、刷毛整形。内面、刷毛整形後ナデ調整。脚台部10%残。	胎土 A微、F II少 焼成 普通 色調 淡橙褐色	
4	台付甕	脚径 10.0	緩やかに外反する脚台部。内外面ともに刷毛整形。甕底部は刷毛整形後、ナデ調整を加える。脚台部完存。	胎土 A微、F II少 焼成 良好 色調 橙褐色	
5	埴	底径 (5.2)	偏平で小型の胴部。頸部のくびれは小さく、口縁部は斜方向に大きく開き、最大径は胴径より口径のほうが大きくなるようである。外面、剝落が著しいが、一部にヘラ磨き痕が残る。内面、胴部は木口状工具によるナデ後ナデ調整。口縁部はヘラ磨き。外面及び口縁部内面を赤彩。残存、30%	胎土 FH少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
6	器台	脚径 (10.0)	胴部分で僅かに外反する脚部。円孔を有する。外面、刷毛整形後丁寧なナデ調整。内面、剝落のため調整不明。脚部10%残。	胎土 A微、F GH少 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	

第7号住居跡（第20図）

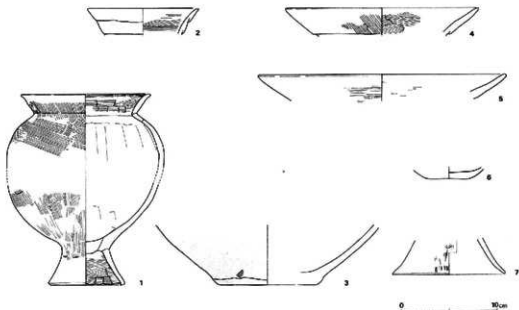
調査区中央西側イ〜ウー7〜9グリッドに位置する。南側で第6号住居跡と切り合うが、本跡のほうが新しい。また、東側を第1号堀に西側を第11号住居跡に破壊されているため、全容は不明な点が多い。規模は土層の様子から南北5.5mと推測できるが、東西方向は不明である。北壁及び北西隅の状態から、コーナーにやや丸味をもつ方形プランを呈するものと思われる。壁際の掘り込みは10cm程と浅く、第6号住居跡と同様に上層部は破壊を受けているため、本跡に相当する覆土は薄い。床面は若干の高低差があるがほぼ平坦であり、隣接する第6号住居跡との高低差はない。ピット・炉址等は存在しないものと思われる。遺物は南東部よりはほぼ完形に近い台付甕形土器（№1）が出土している。なお、本跡に該当する遺物はおよそ100点余りとみている。



土層註

1. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子を少量含む。粘性、あり。しまり、良。

第20図 第7号住居跡実測図及び出土遺物接合図



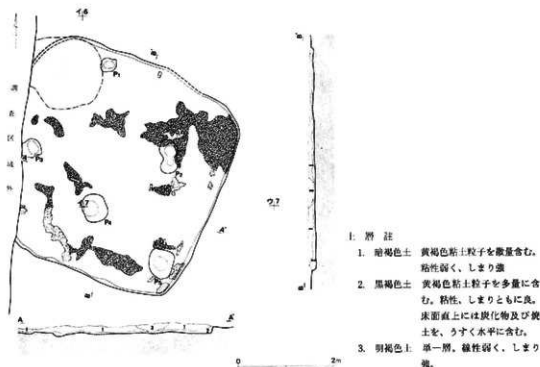
第21図 第7号住居跡出土遺物実測図

第8表 第7号住居跡出土遺物 (1) (第21図)

番号	器 種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
1	台付甕	口径 (13.6) 胴径 (16.5) 脚径 8.0 器高 (20.0)	頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反する。頸部内面の被は鋭くなる。胴部は肩部にやや張りがあり、ほぼ球形となる。脚台部は短かく、僅かに外反しながら開く。外面、頸部は縦方向の、肩部は斜方向の、胴下半部は縦方向の刷毛整形。さらに口縁部は横ナデ、脚台部はナデ調整が加えられる。内面、口縁部は横方向の刷毛整形、胴部は木口状工具によるナデ調整が施される。脚台部は刷毛整形のみで、底部内面に粘土のはみ出しあり。外面胴部に煤が付着する。残存、65%	胎土 B H 散 焼成 良好 色調 暗茶褐色	
2	壺	口径 (11.6)	緩やかに外反する口縁部。二段の複合口縁をつくり出すように輪横歯を外面に残す。外面、ナデ調整。内面、横方向の刷毛整形。口縁部10%残。	胎土 F H 多 焼成 やや不良 色調 暗橙褐色	
3	壺	底形 (11.6)	平底の底部。胴部は底部から微妙に内彎しながら大きく開く。内外ともに丁寧なナデ調整。外面を赤彩。底部20%残。	胎土 A G 散、F H 少 焼成 普通 色調 淡橙褐色	

第9表 第7号住居跡出土遺物 (2)

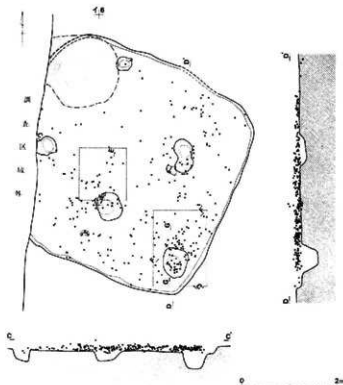
番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
4	壺	口径 (10.2)	微妙に内彎しながら大きく外傾する口縁部。内外面ともに刷毛整形。口縁端部は横ナデを加える。口縁部5%残。	胎土 F H少 焼成 やや不良 色調 橙褐色	
5	高杯	口径 (26.0)	微妙に内彎する杯端部。内外面ともに刷毛整形後ナデ調整。杯部10%残。	胎土 A微、F H多 焼成 普通 色調 淡褐色	
6	鉢	底径 (4.8)	平底の底部。内外面ともに剝落のため調整不明。底部90%残。	胎土 A微、G少、F H多 焼成 やや不良 色調 淡褐色	
7	器台	脚径 (11.8)	直線的に開き、裾部分で外反する脚部。円孔を有し、現在部分で1箇所確認できる。外面、細かい刷毛整形後ナデ調整。裾部に横ナデを加える。内面、横方向のナデ調整。調整痕は明瞭である。外面に黒斑。赤彩の可能性あり。脚部20%残。	胎土 A微、F H少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	



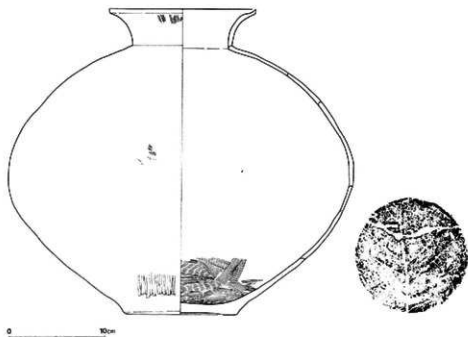
第22図 第8号住居跡実測図

第8号住居跡（第22・23・27・28図）

調査区中央西側ア～イー6～7グリッドに位置する。今回の調査のうちで唯一他の遺構と重複しない住居跡であったが、残念なことに西側が調査区域外となってしまった。また、北西隅に攪乱を受ける。遺構確認時には南側の第11号住居跡と一部重複するのではないかとみていたが、古い本跡の南壁がはっきり検出できたため、その可能性はないものとなった。規模は、東西方向は推定となるが、東西・南北ともに4.6mの、コーナーに丸味をもち若干膨が張る正方形プランを呈する。壁は若干の傾斜をもって削り込まれ、深さ12cm前後である。床面は北東方向に向かって若干高まるが、ほぼ平里である。下層部分の覆土は、壁面近くや床面及び直上に残存していた炭化材の影響を受けて、炭化粒子が多く含まれている。焼土粒子も同様で、本跡は焼失住居とみてよさそうである。床面は火災時の火熱を受けたらしく、赤褐色化しており固く締まっているものの、継続加熱を行った箇所は見当たらず、炉址と限定するには至らなかった。ピットは5箇所検出された。P1は直径33cm、深さ17cm。P2は直径70cm、深さ13cm。P3は直径40cm、深さ23cm。P4は直径58cm、深さ24cm。P5は直径64cm、深さ34cm。P5周囲及び内部に土器片が集中しており、規模・形状からみても貯蔵穴にあたるものと思われる。遺物は287点が出土した。北西の攪乱の周囲を除くほぼ全面から出土しており、特に南東部は高密度である。中央やや南西寄りから大型壺形土器（No1）が出土し、南東部からは台付壺形土器（No9, 11）が出土している。また、中央やや東寄りからと南東部から埴形土器（No13, 14, 15）が、中央付近からは鉢形土器（No16）が出土した。



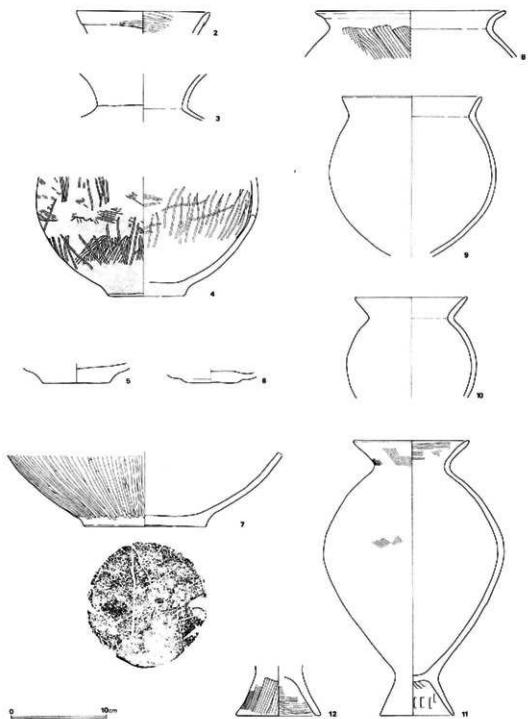
第23図 第8号住居跡遺物出土位置図



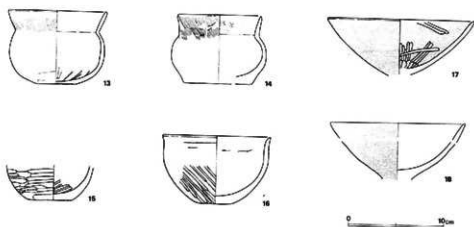
第24図 第8号住居跡出土遺物実測図(1)

第10表 第8号住居跡出土遺物 (1) (第24・25・26図)

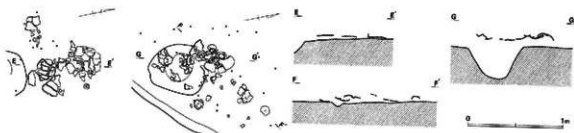
番号	器 種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
1	壺	口径 (15.4) 胴径 36.1 底径 12.0 器高 32.1	胴部中位に最大径をもち、偏球状を呈す。中位に強い張りをもつが、肩部及び下半部は弱く、直線的となる。頸部は「く」の字状に屈曲し、緩やかに外反しながら開く。口縁端部は肉薄となり、つまみ上げたように直立する。外面に平坦面をもつ。底部は平底となる。器面調整は、内外面ともに摩滅が著しく不明瞭であるが、部分的に知ることができる。外面、口縁部は刷毛整形後ナデ調整。胴部中位は細かい刷毛目が残る、後ナデ調整。下位には縦方向のヘラ磨きが見られる。内面は、下位に刷毛目が残る。他はナデ調整。外面胴部中位に10×17cmの黒斑が見られる。底部には木重痕。残存、80%。底部は完存。	胎土 A H散、E少 焼成 普通 色調 淡黄褐色	



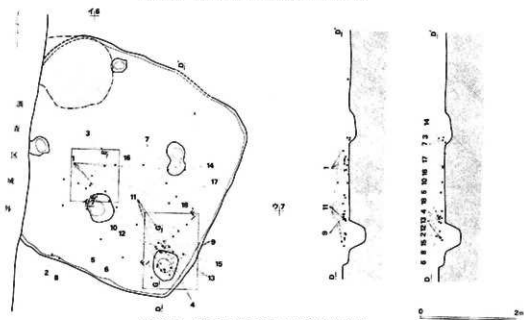
第25图 第8号住居跡出土遺物実測図(2)



第26图 第8号住居跡出土遺物実測図 (3)



第27图 第8号住居跡遺物出土状況図



第28图 第8号住居跡出土遺物接合図

第11表 第8住居跡出土遺物 (2)

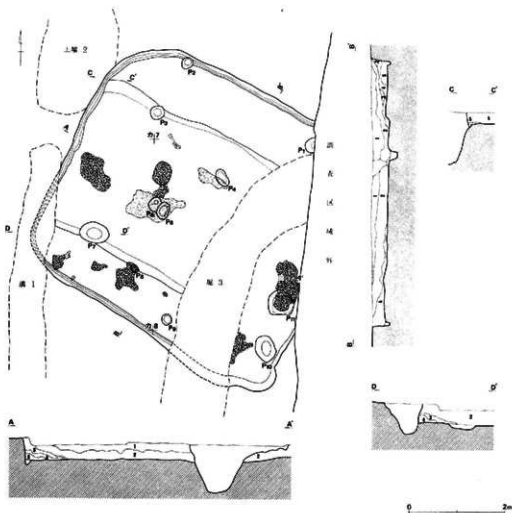
番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
2	壺	口径 (14.0)	複合口縁。外面、ナデ調整。太い刷毛目を残す。内面、刷毛整形。口縁部5%残。	胎土 AD酸、H少 焼成 やや不良 色調 淡褐色	
3	壺		「く」の字状に屈曲する頸部。内面に皺をもつ。口縁部は大きく外反する。外面、刷毛整形後ナデ調整。内面、ナデ調整。頸部40%残。	胎土 FH多 焼成 不良 色調 淡褐色	
4	壺	底径 8.2	底部から緩やかに内彎しながら大きく開く胴下半部。外面、雑で粗い刷毛整形後ナデ調整、さらにヘラ磨き。内面、ナデ調整後ヘラ磨き。外面は赤彩。また、径10cm程の黒斑が認められる。残存、胴下半から底部80%。	胎土 A酸、FGH少 焼成 普通 色調 淡褐色	
5	壺	底径 (7.0)	平底の底部。外面、ナデ調整。内面、木口状工具によるナデ後ナデ調整。底面には、指頭圧痕も見られる。底部80%残。	胎土 D酸、AH少 焼成 良好 色調 橙褐色	
6	壺	底径 (6.2)	平底の底部。外面、摩滅著しく調整不明。内面、丁寧なナデ調整。底部80%残。	胎土 FGH少 焼成 やや不良 色調 淡褐色	
7	壺	底径 12.9	底部から直線的に大きく開く胴下半部。外面、縦方向の丁寧なヘラ磨き。内面は、ナデ調整が施される。底部は、平底で木炭痕が残る。残存、胴下半部から底部70%。	胎土 AF酸、EH少 焼成 普通 色調 暗褐色	
8	甕	口径 (19.8)	頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は外反する。口縁部中ほどがやや肥厚する。外面、刷毛整形。内面はナデ調整。内外面とも口縁端部に横ナデを加える。口縁部25%残。	胎土 A酸、FH多 焼成 普通 色調 淡褐色	
9	台付甕	口径 (14.6) 胴径 (17.2)	胴部の張りは弱い球形を呈す。頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は直線的に外傾する。頸部内面に皺をもつ。内外面ともに剥落のため調整不明。残存、70%。	胎土 FGH多 焼成 やや不良 色調 暗褐色	
10	甕	口径 (11.6) 胴径 (13.6)	球形の胴部。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は直線的に外傾する。内外面ともにナデ調整。外面に黒斑あり。残存、20%。	胎土 FGH多 焼成 普通 色調 淡褐色	
11	台付甕	口径 (12.2) 胴径 (18.6) 脚径 (7.6) 器高 28.8	胴部最大径をやや上位もつ。肩部及び胴下半部の張りは弱く長胴となる。頸部は「く」の字状に屈曲し、緩やかに外反する。肩台部は短かく、微妙に外反気味に開く。内外面ともに摩滅が著しく調整不明瞭であるが若干認められる。外面、口縁部は刷毛整形、胴部及び脚台部は刷毛整形後ナデ調整。内面、口縁部は横方向の刷毛整形。脚台部は木口状工具によるナデ後ナデ調整を施す。胴部中位に張が付着する。残存、70%。	胎土 AG酸、FH多 焼成 やや不良 色調 淡褐色	

第12表 第8号住居跡出土遺物 (3)

番号	器 種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
12	台付甕	脚径 (9.0)	緩やかに外反して開く脚部。内外面ともに太い刷毛整形。脚部80%残。	胎土 F H多 焼成 普通 色調 橙褐色	
13	埴	口径 (10.4) 胴径 (10.0) 底径 (4.2) 器高 (7.8)	胴部はやや偏球状。頸部のくびれは弱く、口縁部は頸部より内彎気味に短かく開く。口縁部と底部は、径をはほぼ同じくする。底部は平底となる。外面、口縁部は縦方向の刷毛整形。胴部上半はナデ、下半はヘラ削り後ナデ調整を施す。内面、胴部上半はナデ、下半は水口状工具によりナデ調整。口縁端部は、内外面ともに横ナデが加える。全体的に丁寧な器面調整である。内外面、胴部から口縁部にかけて同位置に黒斑が見られる。残存、40%。底部は完存。	胎土 G少 焼成 良好 色調 橙褐色	
14	埴	口径 (8.8) 胴径 (10.0) 底径 (7.2) 器高 7.3	緩やかに頸部は屈曲し、口縁部は直線的に短かく開く。胴部の張りが弱く、偏球状を呈す。底部は平底となり、僅かに尖出する。外面、刷毛整形後、胴部のみナデ調整を加える。内面、胴部はヘラ削り後ナデ調整、口縁部は粗い刷毛整形。残存、45%	胎土 F G H少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
15	埴	底径 (5.4)	底部から緩やかに内彎し立ち上がる。平底を呈す。内外面ともに丁寧なヘラ磨き後、赤彩。残存、40%	胎土 F 散、E H少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
16	鉢	口径 (11.2) 底径 (3.6) 器高 (7.2)	平底の底部で、体部は緩やかに内彎して開く。口縁部は僅かに収縮し外傾する。外面はヘラ磨き。内面、ナデ調整。口縁部は内外面ともに横ナデ調整を加える。外面を赤彩。残存、60%	胎土 F H少、G多 焼成 普通 色調 淡橙褐色	
17	高 杯	口径 (15.6)	緩やかに内彎しながら開く杯部。内外面ともに丁寧なヘラ磨き。のち赤彩。ただし外面は剥落が著しい。杯部40%残。	胎土 H少、E G多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
18	高 杯		内彎しながら立ち上がる杯部、外面はヘラ磨き。内面は丁寧なナデ調整。外面を赤彩。杯部40%残。	胎土 A F少、H多 焼成 普通 色調 暗橙褐色	

第9号住居跡 (第29・30・31図)

調査区中央東側オ〜カー6〜9グリッドに位置する。東側は調査区域外となり、北西隅に隣接する第2号土壌より後出するが、東寄り中央は第3号堀の破壊を受けており、更に西側の第1号溝も本跡より新しい。規模は東西6.0mで、南北5.6m、コーナーに丸味を帯びる方形プランを呈する。堀り込みは35cm前後と他の住居跡に比して深く、壁はほぼ垂直に立ち上がる。周囲を幅15cm、深さ10cm前後の壁溝が巡るが、南側の堀から調査区域外に至るまでは確認できなかった。床面は、北側と南側が約5cm余りの比高をもって一段高くなっているが、それ以外はほぼ平坦である。北側を除いたほぼ全面

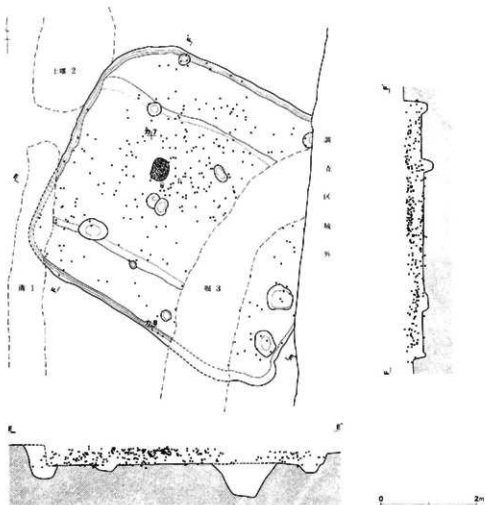


土 層 註

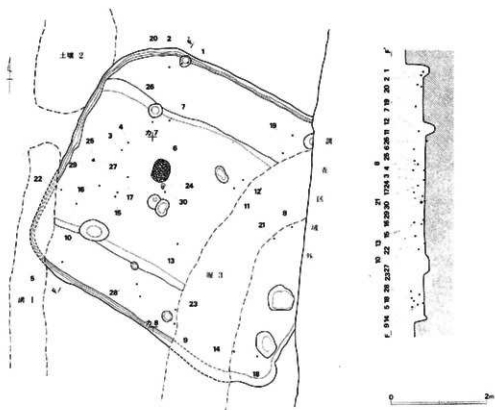
1. 明褐色土 黄褐色粘土粒子を少量含む。炭化物を部分的に微量含む。粘性、しまりともにあまりなし。
2. 明褐色土 黄褐色粘土粒子を多量に含む。粘性弱。しまり良。B'付近における下部には炭化物を多量に含む。
3. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子を少量含む。焼土粒子を多量に含む。粘性あり。しまり良。
4. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子。同ブロックを多量に含む。粘性あり。しまり良。
5. 黒褐色土 黄褐色粘土粒子を少量含む。粘性あり。しまり良。

第29図 第9号住居跡実測図

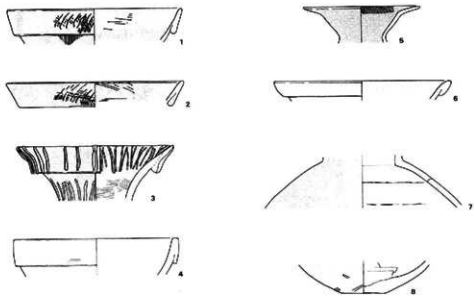
に炭化物及び焼土が存在し、床面付近にはそれらの粒子が多く含まれている。中央やや北西寄りには、固く焼き締った雑炭加熱を思わせる所があり、炉床と思われる。掘り込みは約5cm余りで、覆土は赤褐色ブロックであった。ピットは11箇所検出された。P1は直径30cm、深さ8cm。P2は直径25cm、深さ13cm。P3は直径30cm、深さ24cm。P4は直径38cm、深さ7cm。P5は直径31cm、深さ19cm。P6は直径36cm、深さ10cm。P7は直径61cm、深さ14cm。P8は直径17cm、深さ12cm。P9は直径23cm、深さ12cm。P10は直径55cm、深さ17cm。P11は直径54cm、深さ25cmを測る。P3及びP7は、堀中にあると思われる2本と合わせて主柱穴を構成するものと思われる。遺物は302点検出した。周囲を除くほぼ全面から出土し、炉址付近で若干高密度となる。P2内から2点(Na1, 2)、中央西寄りから2点(Na3, 4)、及び炉址内から1点(Na6)の複合口縁を呈する壺形土器が出土している。また南東隅からはS字状口縁を呈する台付甕形土器(Na14)が出土した。南西隅から出土の壺形土器(Na5)、南壁掘探より出土の甕形土器(Na9)の口縁部も興味深い。他に東側より砥石(Na30)が1点出土している。



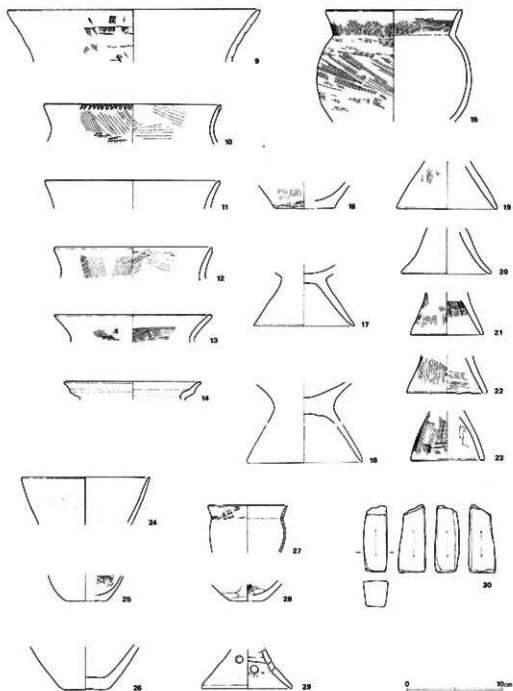
第30図 第9号住居跡遺物出土位置図



第31图 第9号住居跡出土遺物接合図



第32图 第9号住居跡出土遺物実測図(1)



第33图 第9号住居跡出土遺物実測図(2)

第13表 第9号住居跡出土遺物 (I) (第32・33図)

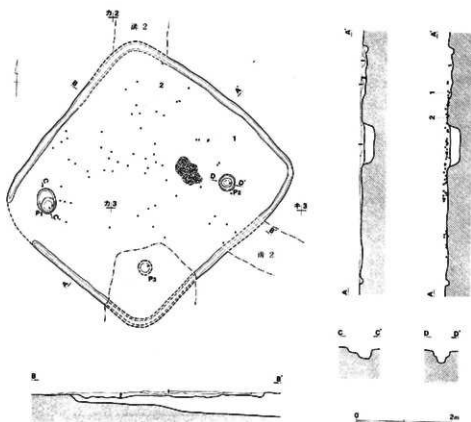
番号	器 種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
1	壺	口径 (18.3)	外傾し立ち上がる口縁部。複合口縁を呈す。外面、複合部下は刷毛整形、複合部はLR+Rの縄文を施す。内面は、横方向の刷毛整形後ナデ調整。内外面ともに赤彩。口縁部10%残。	胎土 A微、FH少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
2	壺	口径 (18.6)	外傾する口縁の複合部。外面、刷毛整形後LR+Rの縄文を施す。内面、刷毛整形後丁寧なナデ調整。内外面ともに赤彩。口縁部10%残。	胎土 A微、FH少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
3	壺	口径 (16.4)	複合口縁を呈す。頸部から大きく外反して口縁部に至る。口唇部は若干円く尖っている。口縁部には、ほぼ等間隔 (約 1.5cm) に棒状浮文が、現状では12本確認できる。外面、口縁部横ナデ後縦方向のヘラ磨き。頸部は刷毛目を残す。外面及び内面口縁部を赤彩。口縁部40%残。	胎土 E H微 焼成 普通 色調 橙褐色	
4	壺	口径 (17.4)	緩やかに内彎しながら外傾し立ち上がる口縁部。複合口縁。口縁端部は平坦となる。内外面ともにナデ調整。複合部外面には、刷毛目を残す。口縁部5%残。	胎土 A微、FH少 焼成 やや不良 色調 暗橙褐色	
5	壺	口径 (12.0)	頸部から内彎気味に外傾し、上半で屈曲し外反する。内外面ともに丁寧なナデ調整。口縁部内面は網目状磨糸文を施す。内外面ともに赤彩。口縁部20%残。	胎土 F少、H多 焼成 良好 色調 暗褐色	
6	広口壺	口径 (18.4)	外傾する口縁部。複合口縁を呈す。内外面ともに丁寧なナデ調整後、赤彩。口縁部10%残。	胎土 A少、FH多 焼成 普通 色調 淡灰褐色	
7	壺		内彎する胴肩部。頸部内面に稜をもち、輪稜痕が残る。内外面ともにナデ調整。外面を赤彩。胴部10%残。	胎土 AF微、H少 焼成 普通 色調 淡橙褐色	
8	壺	底径 (4.4)	小さく平底となる底部。外面、ナデ調整後、部分的にヘラ磨き。内面、ヘラナデ後ナデ調整。外面のみ赤彩。底部には僅かに黒斑が見られる。底部35%残。	胎土 BE微 焼成 普通 色調 淡橙褐色	
9	壺	口径 (26.4)	頸部から緩やかに外反する口縁部。外面に4段の輪稜痕を残す。刷毛整形後ナデ調整。内面は丁寧なナデ調整。口縁部10%残。	胎土 A微、FH少 焼成 普通 色調 淡橙褐色	
10	壺	口径 (18.6)	緩やかに外反する頸部。口縁端部に刷毛状工具による刷毛目を有する。外面は縦方向、内面は横方向の幅広い刷毛整形。口縁部5%残。	胎土 FH少 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	

第14表 第9号住居跡出土遺物 (2)

番号	器 種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
1 1	甕	口径 (18.4)	微妙に外反しながら開く口縁部。内外面ともに刷毛整形後ナデ調整。口縁部5%残。	胎土 A微、H少 焼成 普通 色調 淡褐色	
1 2	甕	口径 (16.4)	直線的に開く口縁部。内外面ともにややわらかい刷毛状工具による調整。口縁部10%残。	胎土 F H少 焼成 普通 色調 淡褐色	
1 3	甕	口径 (16.4)	頸部は「く」の字状に屈曲し、直線的に外傾する。口唇端部には平坦面をもつ。内外面ともに刷毛整形。口縁部上半に横ナデを加える。口縁部5%残。	胎土 F H少 焼成 普通 色調 暗橙褐色	
1 4	台付甕 (S字甕)	口径 (14.4)	「S」字状を呈する口縁部。口縁部の器肉はやや厚く屈曲も弱い。内外面ともに横ナデ調整。口縁部7%残。	胎土 F H微、A少 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
1 5	甕	口径 (14.4) 胴径 (16.2)	頸部は緩やかに外彎し、内面に弱い稜をもつ。口縁部は直線的に開く。胴部は球形を呈すが、肩部の張りも弱い。外面、口縁部は縦方向の刷毛整形、胴部は斜方向に細く浅い刷毛整形を施す。内面、口縁部横方向の刷毛整形、胴部は丁寧なナデ調整。さらに口縁上半部は内外面ともに横方向のナデ調整を加える。外面は全体的に保っている。残存、40%	胎土 A E F 微、H少 焼成 やや不良 色調 黒褐色	
1 6	甕	底径 (6.6)	平底の底部。外面、刷毛整形後ナデ調整。内面ナデ調整。底部20%残。	胎土 F 少、GH 多 焼成 良好 色調 暗橙褐色	
1 7	台付甕	脚径 (10.6)	直線的に開く脚台部。内外面ともに剥落が著しく調整不徹底。脚台部60%残。	胎土 GH 少 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
1 8	台付甕		大きく外彎する脚台部。内外面ともにナデ調整。接合部60%残。	胎土 A H 微 焼成 良好 色調 淡褐色	
1 9	台付甕	脚径 (10.6)	直線的に開く脚台部。外面、刷毛整形後ナデ調整。内面、ナデ調整。脚台部20%残。	胎土 F H 微 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
2 0	台付甕	脚径 (9.4)	緩やかに外反しながら開く脚台部。外面、刷毛整形後ナデ調整。内面、ナデ調整。脚台部30%残。	胎土 H 微、F 少 焼成 普通 色調 暗褐色	

第15表 第9号住居跡出土遺物 (3)

番号	器 種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
2 1	台付甕	脚径 (7.8)	直線的に開く脚台部。外面、刷毛整形後ナデ調整。内面、横方向の丁寧な刷毛整形後、裾部横ナデ調整を加える。脚台部30%残。	胎土 AFG微 焼成 普通 色調 淡橙褐色	
2 2	台付甕	脚径 (8.4)	直線的に開き、端部に向かって僅かに内彎気味となる脚台部。外面、刷毛整形。内面、刷毛整形後ナデ調整。脚台部20%残。	胎土 H微、A少 焼成 普通 色調 淡橙褐色	
2 3	台付甕	脚径 (7.8)	微妙に内彎して開く脚台部。端部は平坦となる。外面、粗い刷毛整形。内面、ナデ調整。一部に木口状工具によるナデ調整痕を残す。内外面ともに裾部を横ナデする。脚台部20%残。	胎土 A微、F H少 焼成 良好 色調 淡褐色	
2 4	鉢	口径 (13.4)	緩やかに内彎しながら開く体部。外面、刷毛整形後丁寧なヘラ磨き。内面はナデ調整。内外面ともに赤彩。体部30%残。	胎土 A微、GH少 焼成 良好 色調 淡褐色	
2 5	鉢	底径 (4.6)	平底を呈する。緩やかに内彎しながら立ち上がる。外面、ヘラ削り後ナデ調整。内面、刷毛整形後ナデ調整。底部に黒斑を有する。底部30%残。	胎土 GH少 焼成 普通 色調 淡灰褐色	
2 6	鉢	底径 (4.6)	底部から直線的に開き立ち上がる。平底を呈す。内外面ともに保存状態不良のため調整等不明瞭であるが、ヘラ磨き痕が見られる。底部外面に大きな黒斑。内外面ともに赤彩の可能性あり。底部80%残。	胎土 A微、GH少 焼成 普通 色調 淡橙褐色	
2 7	小型壺	口径 (8.2)	胴部がふくらみ、頸部で僅かにくびれ、口縁部は外反する。外面、刷毛整形後ナデ調整。内面、ナデ調整。口縁部50%残。	胎土 A微、Q少、H多 焼成 普通 色調 淡褐色	
2 8	鉢	底径 (3.4)	上げ底状を呈する底部。緩やかに内彎しながら立ち上がる。外面、ヘラ削り後ナデ調整。内面、ヘラ状工具によるナデ後ナデ調整。底部30%残。	胎土 GH少 焼成 普通 色調 淡褐色	
2 9	高 杯	脚径 9.5	直線的に開く脚部。外面端部に平坦面をもつ。円孔を4箇所有する。外面は縦方向のナデ調整。内面、刷毛整形後ナデ調整。内面に輪痕み痕が2段見られる。脚部はほぼ完残。	胎土 AE微、H少 焼成 普通 色調 淡橙褐色	
3 0	砥 石	長さ (6.9) 幅 2.6 厚さ 2.6 重さ 73g	砥石。4面が平坦となり、砥ぎ面を形成。上部を欠損する。	石質 砂岩 色調 黄茶褐色	



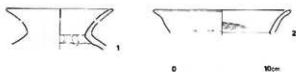
土 層 註

1. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子を微量含む。粘性、しまりともに良。
2. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子を帯状に多量に含む。粘性良。しまり強。

第34図 第10号住居跡実測図及び遺物出土位置図

第10号住居跡（第34図）

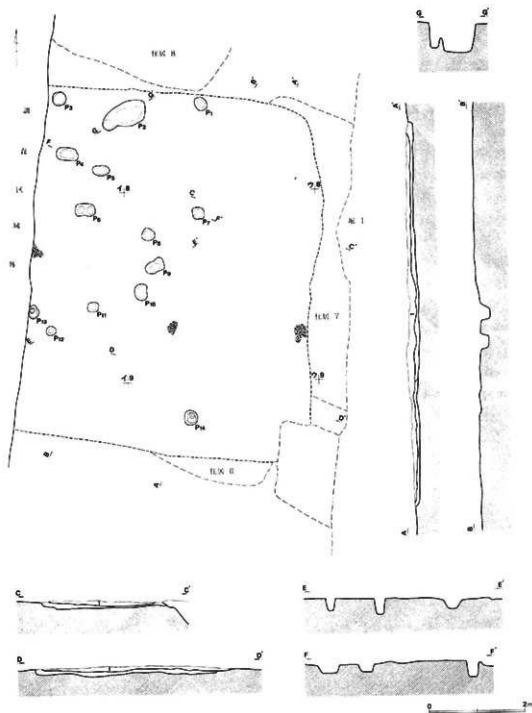
調査区北東オ〜カー2〜3グリッドに位置する。南コーナー付近に擾乱を受け、中央下部を北から東へ向かって第2号溝と切り合っているが、床面の炉址の存在から本跡の方が新しいことがわかる。遺構確認時では他の住居跡よりも明瞭で整ったプランが認められたものの、掘り進めてみると覆土は薄く、部分的であるが壁が全く検出されない箇所もあった。規模は5.0m×4.5mで、コーナーに丸味を帯びた方形プランを呈する。周囲を幅10〜15cm深さ10cm前後の壁溝が巡り、西コーナーで途切れている。炉址は固く焼き締まっているものの、掘り込みはあまりない。壁はゆるやかに立ち上がり、掘り込みは深い所でも10cm程しかない。床面は若干の高低差が認められ、第2号溝の上部ではわずかに落ち込みがみられる。ピットは3本検出され、北側溝中に存在したと思われる1本と合わせて、4本で支柱穴を構成すると推定される。P1は直径52cm、深さ23cm、P2は底面規模からの推定で直径32cm、深さ21cm、P3は直径35cm、深さ25cmを測る。出土遺物は70点と少なく、いずれも小片のみで、図示し得るものは少ない。



第35図 第10号住居跡出土遺物実測図

第16表 第10号住居跡出土遺物（第35図）

番号	器 種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
1	壺		「く」の字状に屈曲する頸部。内面にやわらかい稜をもつ。内外面をナデ調整。内面、頸部下半に輪横み痕を残し、指痕圧痕が見られる。内面上半及び外面を赤彩。頸部20%残。	胎土 A E級 焼成 普通 色調 淡褐色	
2	甕	口径 (14.4)	頸部から外傾し、口唇部に向って外反する口縁部。内外面ともに刷毛整形のちナデ調整。口縁端部は横ナデ調整。口縁部10%残。	胎土 A 級、H少 焼成 普通 色調 茶褐色	



土 層 註

1. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子をまばらに微量含み、炭化物も微量含む。粘性あり。しまり良。

第36図 第11号住居跡実測図

第11号住居跡（第36・37・38図）

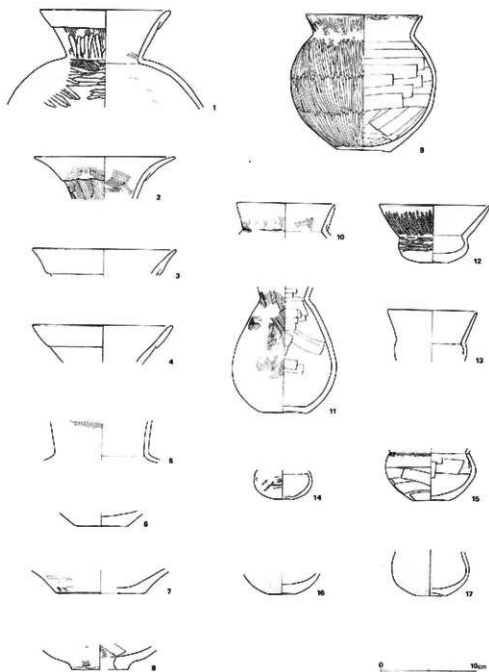
調査区中央西側ア～イー7～9グリッドに位置する。西側が調査区域外となり、南東隅に攪乱を受ける。東側で第6・7号住居跡と切り合って構築されるが、本跡のほうが新しい。遺構確認時は、北側の第8号住居跡も含まれ南北最大幅14m、東西最大幅7m（東側を第1号堀に破壊され西側は区域外）の長大なプランが想定されたが、調査を進めるにしたがい、北側に独立して第8号住居跡が、本跡東寄り下層に二軒、第6・7号住居跡の計四軒が隣接または重複していることが判明した。本跡の周囲は他の区域に対して比較的高く、しかも第6・7号住居跡の上に構築されているため、覆土は10cm前後と薄い。床面の掘り込みが遺構確認面の黄褐粘土層まで到達していないため、壁面や床面が思うように検出できなかったこともあり、不明な点が多い。住居の範囲は、床面を想定し、黄褐粘土と黒褐色土の混合面を基本とし、さらに遺物の分布状況を踏まえ復元した。規模は南北7.5m、東西は検出部分で6.0mであるが、プランの形態は明らかではない。西側と中央及び東側に焼土が検出されたものの、掘り込みはほとんどない。ピットは14箇所検出されたが、ほとんどが北西に偏って存在する。P1は直径29cm、深さ19cm。P2は直径98cm、深さ61cm。P3は直径29cm、深さ13cm。P4は直径48cm、深さ16cm。P5は直径36cm、深さ17cm。P6は直径42cm、深さ16cm。P7は直径29cm、深さ32cm。P8は直径28cm、深さ29cm。P9は直径41cm、深さ19cm。P10は直径34cm、深さ17cm。P11は直径25cm、深さ32cm。P12は直径20cm、深さ27cm。P13は直径28cm、深さ27cm。P14は直径30cm、深さ34cmを測る。遺物は、本跡に属することが判明している図示可能な遺物についてのみ記した。小片に関しては、本跡及び第6・7号住居跡との分類が困難なため、三軒の住居跡を一括して分布図を作成した。北壁中央脇と東壁中央部際からそれぞれ完形に近い壺形土器（№9、11）が出土し、その他複合口縁を呈する壺形土器の口縁部が4点出土している。また、中央南東寄りから大型の甕形土器が2点（№18, 19）、西側からは埴形土器（№15）、東壁中央部脇からは器台（№32）、中央部より砥石（№35）が出土した。本跡に属する遺物は600点余りとみている。



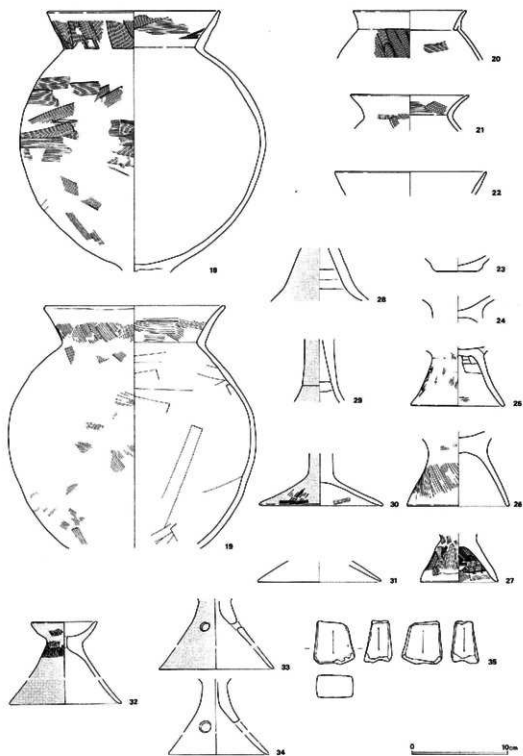
第37图 第6・7・11号住居跡遺物出土位置図



第38図 第11号住居跡出土遺物接合図



第39图 第11号住居跡出土遺物実測図(1)



第40图 第11号住居跡出土遺物実測図(2)

第17表 第11号住居跡出土遺物 (1) (第39・40図)

番号	器 種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
1	壺	口径 (13.6)	緩やかに外反しながら開く口縁部。複合口縁を呈す。頸部が強く「く」の字に屈曲し、肩部に張りをもつ。外面、刷毛整形後ヘラ磨き。複合部に横ナデを施す。内面は刷毛整形後、口縁部は横ナデ、肩部はナデ調整。外面に赤彩痕あり。口縁部25%残。	胎土 AG散、FH少 焼成 普通 色調 淡橙褐色	
2	壺	口径 (14.6)	緩やかに外反する口縁部。複合口縁。内外面ともに刷毛整形後、口縁端部に横ナデを加える。口縁部15%残。	胎土 EF多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
3	壺	口径 (15.0)	僅かに外反する口縁の複合部。端部に向って器唇となる。内外面ともに器面状態不良のため調整不明。口縁部5%残。	胎土 A散、GH少 焼成 やや不良 色調 橙褐色	
4	壺	口径 (14.6)	僅かに内彎する口縁部。内外面ともに摩滅が著しく不明瞭であるが、外面下位に刷毛整形痕、さらに内外面ともに部分的に赤彩痕が認められる。口縁部20%残。	胎土 ADGH散 焼成 やや不良 色調 橙色	
5	壺		胴部から「く」の字状に屈曲し、直立する頸部。内外面ともにナデ調整。外面上位に刷毛目を残す。頸部20%残。	胎土 FG少、H多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
6	壺	底径 (5.2)	平底の底部。外面、ヘラ磨き。内面は剥落のため調整不明。底面には部分的であるが、木炭痕が認められる。外面を赤彩。底部30%残。	胎土 A散、EF少、H多 焼成 やや不良 色調 淡褐色	
7	壺	底径 (9.4)	平底の底部。内外面ともにナデ調整。胴最下部にヘラナデを加える。底部25%残。	胎土 A散、FH少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
8	瓶	底径 (5.8)	底部から大きく開く。底部に孔を有す。現存では2孔が確認できる。外面、刷毛整形後ナデ調整。内面、ナデ調整。ヘラナデ調整痕も認められる。底部30%残。	胎土 F散、H少 焼成 良好 色調 淡赤褐色	
9	広口壺	口径 12.2 胴径 15.3 底径 5.6 器高 14.4	底部から内彎して立ち上がる球形の胴部。肩部の張りは弱い。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反気味に広く開く。底部は平底となる。外面、口縁部は縦方向の刷毛整形、胴部は粗い刷毛整形後、三段に分割して丁寧なヘラ磨き。底部は、ヘラ削り後ナデ。内面、口縁部は刷毛整形後ナデ調整。胴部上半は、木口状工具による横方向のナデ。下半は、斜方向のヘラ削り。外面に赤彩痕有り。また、胴部に10×7cm大の黒底が認められる。残存、90%、底部は完存。	胎土 BD散、FGH少 焼成 良好 色調 淡赤褐色	

第18表 第11号住居跡出土遺物 (2)

番号	器 種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
10	鉢	口径 (10.4)	直線的やや内彎する口縁部。頸部内面には稜をもつ。外面、刷毛整形後ナデ調整。内面は丁寧な磨き。口縁部30%残。	胎土 A H微 焼成 良好 色調 暗橙褐色	
11	壺	胴径 (11.0) 底径 (4.8)	胴部は、最大径を下位にもち長胴となる。胴部の張りはなく、頸部に向かって細く収縮する。口縁部は、欠損部分が大きく全体は明らかではないが、短かく内彎気味に僅かに外傾し立ち上がる。底部は平底となる。外面、刷毛整形後ナデ調整。内面はナデ調整。胴部上半には木口状工具によるナデ調整痕を残す。胴部60%残。	胎土 A F G H少 焼成 普通 色調 淡橙褐色	
12	埴	口径 11.7 胴径 7.3 底径 2.7 器高 6.1	口縁部は頸部より微妙に内彎しながら大きく開く。胴部は扁平で、張りは弱い。頸部のくびれは弱い。内面に鋭い稜をもつ。底部は、上げ底となる。外面、ナデ調整後ヘラ磨き。頸部に縦方向の刷毛目が残る。内面、ナデ調整。外面及び内面口縁部を赤彩。残存、80%。底部は完存。	胎土 E H微、A少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
13	埴	口径 (9.5)	頸部のくびれは弱く、口縁部は直線的に外傾し開く。頸部内面に稜をもつ。外面は摩滅が著しく調整不明瞭。内面は丁寧な磨き、後赤彩。口縁部10%残。	胎土 A 微、G H少 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
14	埴	胴径 (6.1) 底径 (1.8)	小型ではあるが、胴部が張り偏球状を呈す。外面、刷毛整形ナデ調整。内面はナデ調整。内外面ともに赤彩。残存、25%。	胎土 A F G H微 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
15	埴	胴径 9.5 底径 3.8	大きく内彎する胴部。最大径はやや上位にもつ。底部は平底となる。外面、胴部上半は刷毛整形後ナデ調整、下半はヘラ削り後ナデ調整。内面はナデ調整。上半には木口状工具によるナデ調整痕が残る。内外面ともに赤彩。また、径6cm大の黒斑が認められる。頸部以下完存。	胎土 A E F 微 焼成 良好 色調 橙褐色	
16	埴	底径 (2.8)	底部は上げ底状となり、緩やかに内彎しながら立ち上がる。外面、ヘラ削り後ナデ調整。内面、ナデ調整。外面に赤彩痕を残す。胴部に黒斑あり。胴部30%残。底部は完存。	胎土 E 微、F G H少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
17	埴	胴径 (8.1) 底径 (2.9)	胴部が張り、偏球状を呈す。底部は上げ底状となる。外面、ヘラ磨き。内面はナデ調整。内外面ともに赤彩。残存、30%。	胎土 A F G 微、H少 焼成 良好 色調 淡褐色	

第19表 第11号住居跡出土遺物 (3)

番号	器 種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
18	台付甕	口径 18.4 胴径 24.0	頸部は「く」の字状に屈曲し、内面に稜をもつ。口縁部は直線的に外傾する。胴部は強く張り、最大径を中位にもつ球形を呈す。外面、口縁部は縦方向、胴部は横方向及び斜方向の刷毛整形。口縁端部に横ナデ調整を加える。内面、口縁部は横方向の刷毛整形、胴部はナデ調整を施す。外面胴部中位及び内面胴部下半に大きく張が付着する。残存、70%。脚台部を欠損する。	胎土 EH少、F多 焼成 普通 色調 暗橙褐色	
19	甕	口径 10.1 胴径 (26.1)	頸部は「く」の字状に屈曲し、内面に稜をもつ。口縁部は微妙に外反しながら開く。胴部の張りは弱く長胴となる。最大径はやや上位にある。外面、口縁部は斜方向の刷毛整形後ナデ調整。胴部は、雑な削り後刷毛整形及びナデ調整。内面、口縁部は横方向の刷毛調整。胴部は木口状工具によるナデ後ナデ調整。内外面ともに口縁部は横ナデを加える。外面胴部中位に大きな黒斑あり。残存、40%。口縁部は完存。	胎土 AGH微 焼成 普通 色調 暗灰褐色	
20	甕	口径 (12.0)	「く」の字状に屈曲する頸部。口縁部は短く外反する。頸部内面は、口縁部からの粘土が僅かに突出する。外面、頸部以下を刷毛整形、口縁部を横ナデ調整。内面、刷毛整形後ナデ調整。口縁部10%残。	胎土 A微、H少 焼成 やや不良 色調 橙褐色	
21	甕	口径 (12.6)	弱く「く」の字状に屈曲する頸部。内面に稜をもつ。口縁部は緩やかに外反する。外面、刷毛整形。内面、頸部下はナデ調整、口縁部は横方向の刷毛整形。後、内外面ともに口縁端部に横ナデを加える。口縁部15%残。	胎土 FH多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
22	甕	口径 (15.8)	直線的に開く口縁部。外面、横ナデ調整。内面は摩滅のため調整不明瞭。口縁部15%残。	胎土 G少、FH多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
23	甕	底径 4.6	平坦な底部。内外面ともにナデ調整。内面には張が付着する。底部90%残。	胎土 A微、GH少 焼成 やや不良 色調 淡褐色	
24	台不甕		接合部。外面、ヘラナデ調整。内面、甕部ナデ調整、脚台部指ナデ度が残る。接合部80%残。	胎土 AE微、FH少 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
25	台付甕	脚径 9.8	緩やかに外反はながら開く脚台部。内外面とも摩滅が著しく不明瞭であるが、内面上位を木口状工具によるナデ調整、他は刷毛整形が施されたものと思われる。天井部には指ナデ調整痕が認められる。脚台部90%残。	胎土 A微、H少 焼成 普通 色調 淡黄褐色	

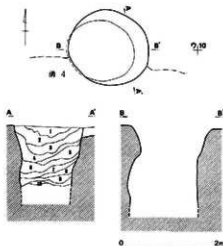
第20表 第11号住居跡出土遺物 (4)

番号	器 種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
26	台付甕	脚径 10.7	微妙に内彎気味に開く脚台部。外面、斜方向の刷毛整形。内面、上位を木口状工具によるナデ後、全体をナデ調整。最後、天井部に指ナデを加える。脚台部ほぼ完存。	胎土 E H微、A少 焼成 普通 色調 橙褐色	
27	台付甕	脚径 8.1	直線的に開く脚台部。端部内側は折り返し状となり肥厚する。内外面ともに刷毛整形後、端部に指ナデを加える。内側折り返し部分にも刷毛整形痕が残る。脚台部ほぼ完存。	胎土 A F微、GH少 焼成 普通 色調 暗橙褐色	
28	高 杯		緩やかに外反する脚部。外面、ヘラ削り後ナデ調整。内面、ナデ調整。輪郭痕を見ることが出来る。外面のみ赤彩。脚部20%残。	胎土 A E G H少 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
29	高 杯		柱状となる脚部上半。内外面ともにナデ調整。内面は雑な調整であり、輪郭痕が残る。外面は調整後赤彩。脚部40%残。	胎土 A F少、H多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
30	高 杯	脚径 (12.8)	上半が柱状に直立し、裾部が屈曲して大きく開く脚部。外面、刷毛整形後ヘラ磨き。内面は刷毛整形後ナデ調整。外面を赤彩。脚部40%残。	胎土 G少、H多 焼成 良好 色調 淡橙褐色	
31	高 杯	脚径 (13.0)	大きく開く裾部。内外面ともに摩滅著しく調整不明瞭。脚部20%残。	胎土 F G H少 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
32	器 台	口径 7.0	受部は内彎し皿状に開く。貫通孔を有する。脚部は直線的に大きく開くようである。内外面ともに器面の剥落が著しく不明瞭である。二次的火熱を受けた可能性あり。外面の一部分に刷毛整形及びヘラ磨き調整痕が認められる。外面を赤彩。残存、70%	胎土 A E微 焼成 良好 色調 淡褐色	
33	器 台		接合部から緩やかに外反しながら開く脚部。貫通孔及び円孔を有す。外面、刷毛整形後ナデ調整。内面は、ナデ調整。外面を赤彩。脚部40%残。	胎土 E G少、H多 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
34	器 台		緩やかに開く脚部上半。器面の保存状態不良のため調整は不明瞭であるが、内外面ともにナデ調整が施されたと思われる。円孔は、現存で1ヶ所確認できる。脚部40%残。	胎土 G H少 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
35	砥 石	長さ (4.6) 幅 4.3 厚さ 2.3 重さ 73g	砥石。砥ぎ面を4面形成する。上・下部を欠損。	石質 砂岩 色調 明褐色	

(2) 土壌と出土遺物

第1号土壌 (第41図)

調査区南西寄りイー9～10グリッドに位置する。南側で第4号溝と切り合うが、本跡のほうが新しい。形態は円形で、開口部の長径1.7m、短径1.5mを測る。深さは1.8mまでは確認できたが、それ以下は湧水が著しく調査不可能となっていた。側面は開口部から60cm程までが漏斗状で、それ以下は、西側で壁の崩壊により中位が大きく抉られているが、ほぼ円筒状に掘り込まれている。以上のことから確たる証拠はないが本跡は井戸跡とみてよさそうである。出土遺物は皆無であった。廃棄後は、一気に埋め戻されたようである。同質の土層となっていた。層序については含まれるブロックによって分層した。



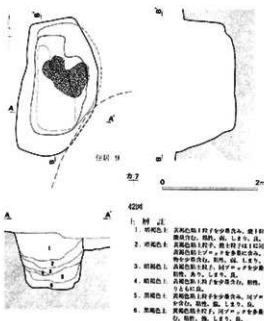
41図

1. 砂礫色土 灰褐色土とブロッコ、灰褐色土とブロッコを少量含む。粘性、しまりともに低。
 2. 砂礫色土 灰褐色土とブロッコ、灰褐色土とブロッコを全体的に多量に含む。粘性、しまりともに低。
 3. 砂礫色土 灰褐色土とブロッコを多量に含む。粘性、しまりともに低。
 4. 砂礫色土 灰褐色土とブロッコを多量に含む。粘性、しまりともに低。
 5. 砂礫色土 灰褐色土とブロッコを全体的に多量に含む。粘性、しまりともに低。
 6. 砂礫色土 灰褐色土とブロッコを全体的に多量に含む。粘性、しまりともに低。
 7. 砂礫色土 灰褐色土とブロッコ、灰褐色土とブロッコを全体的に多量に含む。粘性、しまりともに低。
 8. 砂礫色土 灰褐色土とブロッコを多量に含む。粘性、しまりともに低。
 9. 砂礫色土 灰褐色土とブロッコを多量に含む。粘性、しまりともに低。
 10. 砂礫色土 灰褐色土とブロッコを多量に含む。粘性、しまりともに低。

第41図 第1号土壌実測図

第2号土壌 (第42・43・44図)

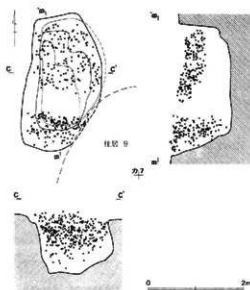
調査区中央東側オー6グリッドに位置する。南東隅で第9号住居跡とわずかに切り合うが、本跡のほうが古い。形態は長楕円形で、開口部では長径2.8m、短径1.6mを測る。深さ1.3mで南壁がやや緩やかに掘り込まれる以外は、ほぼ垂直に近いかたちで掘り込まれている。底面は若干高低差をもつがほぼ平坦で、長径1.8m、短径0.8mを測る。また底面の一部にはテラス状に傾斜が緩やかなところがあり、その東側は壁の崩壊により中位が抉られている。開口面より30cm余下部に焼土が広がっており、そのレベルで遺物の集中が多少みられた。出土遺物は463点と極めて多量であり、ほぼ全面から出土したが、特に南側が高密度である。南東端からは複合口縁を呈する変形土器の口縁部が出土している。図示し得る遺物も含め、出土量の割には遺物のほとんどが小片であった。本跡の機能、目的等で不明な点が多い。



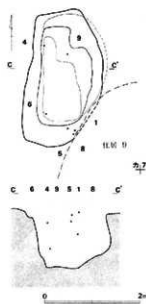
42図

1. 砂礫色土 灰褐色土とブロッコを少量含む。焼土と灰褐色土を少量含む。粘性、低。しまり、低。
 2. 砂礫色土 灰褐色土とブロッコを少量含む。焼土と灰褐色土を少量含む。粘性、低。しまり、低。
 3. 砂礫色土 灰褐色土とブロッコを少量含む。焼土と灰褐色土を少量含む。粘性、低。しまり、低。
 4. 砂礫色土 灰褐色土とブロッコを少量含む。焼土と灰褐色土を少量含む。粘性、低。しまり、低。
 5. 砂礫色土 灰褐色土とブロッコを少量含む。焼土と灰褐色土を少量含む。粘性、低。しまり、低。
 6. 砂礫色土 灰褐色土とブロッコを少量含む。焼土と灰褐色土を少量含む。粘性、低。しまり、低。

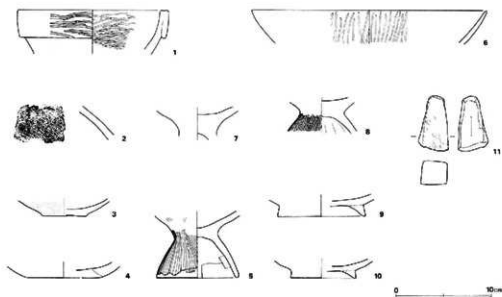
第42図 第2号土壌実測図



第43图 第2号土壙遺物出土位置图 (1)



第44图 第2号土壙遺物出土位置图 (2)



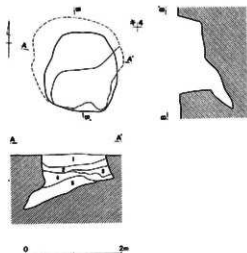
第45图 第2号土壙出土遺物実測图

第21表 第2号土坑出土遺物 (第45図)

番号	器 種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
1	壺	口径 (15.8)	複合口縁。頸部から斜方向に開き、複合部で直立する。口縁端部は平坦となる。外面、頸部はナデ調整、複合部はナデ後ヘラ磨きを加える。内面は丁寧なナデ後ヘラ磨き。外面を赤彩。口縁部10%残。	胎土 A E H 微 焼成 良好 色調 暗橙褐色	
2	壺		肩部破片。外面、ナデ調整後、無筋 R.L の斜縄文下に1条のS字状結節文が廻る。内面、ヘラナデ後ナデ調整。外面無文部分に赤彩痕あり。	胎土 A H 微 焼成 やや不良 色調 褐色	
3	壺	底径 (4.6)	小型の底部。内外面ともにナデ調整。外面を赤彩。底部25%残。	胎土 A 微、G 多 焼成 普通 色調 淡茶褐色	
4	壺	底径 (7.8)	木炭灰を残す底部。内外面ともに丁寧なナデ調整。底部20%残。	胎土 A D E G H 少 焼成 やや不良 色調 暗橙褐色	
5	台付甕	脚径 8.7	微妙に内彎しながら開く脚台部。外面、刷毛整形後、甕部のミナデ調整。内面、甕部ナデ調整、脚台部はヘラナデ後ナデ調整。外面に煤が付着。	胎土 E 微 焼成 良好 色調 茶褐色	
6	高 杯	口径 (24.6)	緩やかに内彎しながら大きく開く杯部。内外面ともにナデ調整後丁寧なヘラ磨き。赤彩の可能あり。杯部5%残。	胎土 A H 微 焼成 良好 色調 淡褐色	
7	高 杯		杯部下平及び接合部。内外面ともに保存状態不良のため不明瞭であるが、ナデ調整後赤彩されていた可能性あり。接合部80%残。	胎土 A E G 微、H 少 焼成 普通 色調 淡褐色	
8	高 杯		接合部。外面はナデ調整後、脚部ヘラ磨き。内面、杯部はナデ調整。脚部はヘラナデ後ナデ調整。杯部内外面及び脚部外面を赤彩。接合部80%残。	胎土 A E 微 焼成 普通 色調 淡橙褐色	
9	土師器 杯	高台径(9.2)	杯底部及び高台部。高台部は「ハ」の字状に開く。内外面ともにナデ調整。杯部内面はヘラ磨きを加える。高台部は横ナデ。底部25%残。	胎土 A H 微 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
10	土師器 杯	高台径(6.9)	杯底部及び高台部。高台部は小さく「ハ」の字状に開く。接地面は少ない。高台部は横ナデ。内外面ともにナデ調整を施す。底部15%残。	胎土 A H 微 焼成 やや不良 色調 淡橙褐色	
11	砥 石	長さ (5.7) 幅 (2.7) 厚さ (2.5) 重さ 56g	砥石。砥ぎ面を表面の2面形成する。一面には金属製のものによると思われるが、断面V字形の鋭いキズを残す。左右上下部を磨損。	石質 凝灰岩 色調 淡灰褐色	

第3号土坑 (第46図)

調査区北東寄りカー4グリッドに位置する。形態はほぼ円形で、開口部の長径1.8m、短径1.4mを測る。深さ約0.5mで底面が出現したと思われたが、西側と北側が大きく挟られるようにして下へと掘り込んであるのが判明した。最深部で開口部から1.1mを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。南東側も同様に掘り進むことが可能で所謂フラスコ状を呈するかと思われたが、固く締まっておりその可能性はない。遺物量は少ないため一括で採り上げを行ったが、図示し得るものはない。



土 層 註

1. 明褐色土 黄褐色粘土粒子を少量含む、焼土粒子をごく微量含む。粘性、しまりともに良。
2. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子を帯状に多量に含む。粘性、しまりともに良。
3. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子を微量含む。粘性あり、しまり強。
4. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子、白色粘土粒子を少量含む、炭化物を微量含む。粘性あり、しまり強。
5. 黒褐色土 黄褐色粘土粒子、同ブロックを多量に含む、灰白色粘土も多量に含む。粘性、しまりともに強。

第46図 第3号土坑実測図



第47図 第1号溝出土遺物実測図

第22表 第1号溝出土遺物 (第47図)

番号	器 種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
1	壺	口径 (15.2)	直線的に外傾する口縁部。複合口縁を呈す。外面、下半は縦方向の刷毛整形、複合部ナデ調整。内面、刷毛整形後ナデ調整。内外面を赤彩。口縁部20%残。	胎土 A H散 焼成 普通 色調 淡橙褐色	
2	土師器 杯	高台径 (7.6)	高台部は、若干「ハ」の字状に開く。下端は丸く尖る。内外面とも摩滅のため調整不明瞭であるが、横ナデ及びナデ調整を行ったと思われる。底部15%残。	胎土 A散、H少 焼成 やや不良 色調 淡黄褐色	

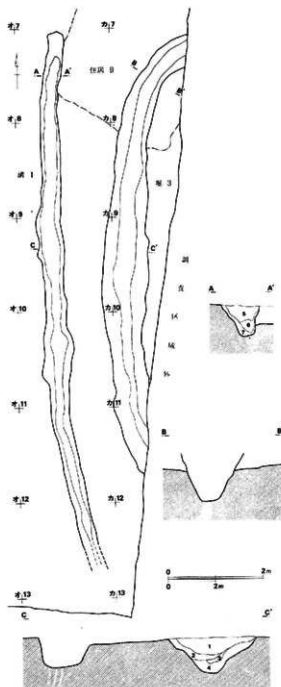
(3) 溝と出土遺物

第1号溝 (第48図)

調査区中央東よりオー7～12グリッドに位置し、ほぼ南北に直線的に構築される溝である。北側の始まりは確認されたが、南端は確認面より消失してしまい、調査区域で立ち上がるか区域外に至るかは不明である。北端付近で第9号住居跡の西隅をわずかに破壊している以外に切り合う遺構はない。形態は中ほどで溝幅が若干広くなり、北側で深度を増している。規模は検出部分で長さ約22m、幅約0.7～1.5m、深さ約0.3～0.7mを測る。壁はやや傾斜をもち緩やかに堀り込まれ、底面形は幅の差はあれU字形である。遺物は、グリッドごとに区分し一括して採り上げた。中央部より複合口縁を呈する壺形土器(№1)が出土した。ほとんどが小片である。

第2号溝 (第49図)

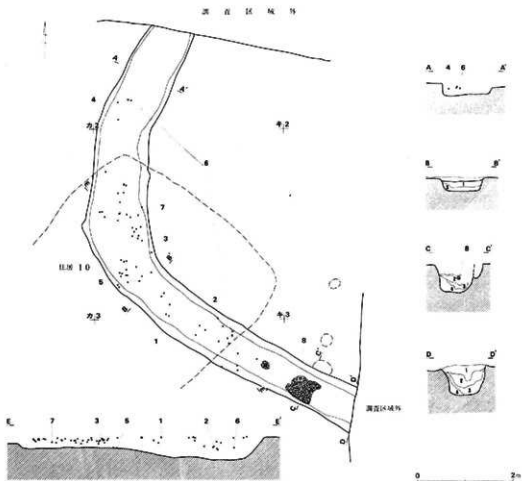
調査区東端カ～キー1～3グリッドに位置する。北と東の両側が調査区域外となり、中央コーナー部分で第10号住居跡と切り合う。本跡のほうが古いが、それは本跡上に第10号住居跡の炉址が構築されていたことから判明する。形態は両端が区域外となるため全容は不明であるが、遺構の形態や規模等から方形周溝墓の可能性が高い。規模は検出部分で北溝5.2m、南溝5.6mを測る。東へ向かうに従いわずかに幅が狭くなり、加えて深さも増している。北端付近で幅110cm、深さ25cm、東端付近では幅90cm、深さ60cmを測る。壁はやや緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。東端付近では焼土が中層部に存在し、その下部からガラス小玉が1点出土した。出土遺物は71点で、コーナー付近に集中しており、しかも上層部に多い。ほとんどが小片である。



土層註

1. 明褐色土 含有物特になし。粘性、しまりともにあまりなし。
2. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子を少量含む。粘性強。しまり良。
3. 暗褐色土 黄褐色粘土ブロックを含む。粘性あり。しまり良。
4. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子を多量に含む。粘性あり。しまり強。
5. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子を少量含む。粘性あり。しまり良。
6. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子を微量含む。粘性あり。しまり良。
7. 黒褐色土 黄褐色粘土粒子、同ブロックを含む。粘性強。しまり良。

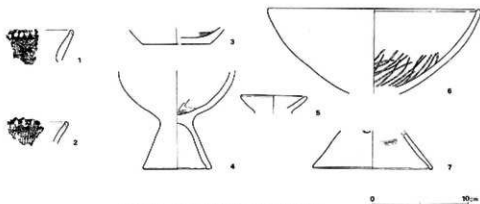
第48図 第1号溝・第3号堀実測図



土 層 註

1. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子を多量に含む。粘性あり。しまり良。
2. 黒褐色土 黄褐色粘土粒子を少量含む。全体的に粘土を含む。粘性あり。しまり強。
3. 黒褐色土 黄褐色粘土粒子を少量含む。粘性、しまりともに強。
4. 黒褐色土 黄褐色粘土粒子を多量に含む。同ブロックも含む。粘性、しまりともに強。

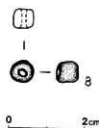
第49図 第2号溝実測図及び遺物出土位置図・接合図



第50図 第2号溝出土遺物実測図

第23表 第2号溝出土遺物 (第50図)

番号	器 種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
1	甕		口唇部に刻み目を有する口縁部破片。内外面に横ナデ調整。	胎土 AFG酸 焼成 普通 色調 黒褐色	
2	甕		口唇部に刷毛状工具による押捺と見られる刻み目を有する口縁部破片。外面、刷毛整形。内面、ナデ調整を施す。	胎土 GH酸 焼成 良好 色調 茶褐色	
3	壺	底径 (7.0)	平底の底部。内外面ともに摩滅が著しく不明瞭であるが、内面に刷毛整形痕が残る。底部20%残。	胎土 E多 焼成 普通 色調 淡褐色	
4	台付甕	胴径 (12.2) 脚径 7.2	直線的に開く小型の脚台部及び球形の胴部下半。脚台部は裾部分で肉薄となり微妙に外反気味となる。端部は平坦で、内側に粘土がはみ出す。外面、刷毛整形後ナデ調整。内面はナデ調整。腰部は其部より内彎しながら立ち上がる。外面、刷毛整形後ナデ調整。内面は、ナデ調整。底部分には木口状工具によるナデ調整痕が残る。胴下半部50%残、脚台部は完存。	胎土 H酸、E多 焼成 普通 色調 淡褐色	
5	器 台	口径 (7.0)	内彎しながら短かく開く受部。内外面ともにナデ調整。口縁端部は横ナデを加える。内外面に赤彩痕あり。受部25%残。	胎土 A酸、FH少 焼成 良好 色調 淡褐色	
6	高 杯	口径 (22.4)	緩やかに内彎しながら大きく開く杯部。口唇部は内削ぎ状となり、弱い稜をもつ。外面、丁寧なナデ調整。内面、ナデ調整後下半部のみへら磨きを施す。内外面ともに赤彩。内面に灰が付着する。杯部25%残。	胎土 FGH酸 焼成 良好 色調 暗橙褐色	
7	高 杯	脚径 (12.6)	微妙に外反しながら開く脚部。円孔を有する。裾部は肉薄となり、端部内側に微量の粘土がはみ出す。内外面に丁寧なナデ調整。内面には、部分的に刷毛整形痕が残る。外面は赤彩される。脚台部10%残。	胎土 A酸、G多 焼成 やや不良 色調 橙褐色	



第24表 第2号溝出土ガラス小玉 (第51図)

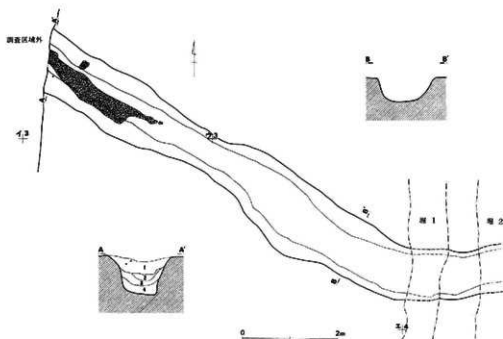
(単位 mm)

番号	縦×横	厚さ	穿径	色調	備考
8	5.5×6.0	2.6	1.5	濃青色	小気泡あり

第51図 第2号溝出土ガラス小玉実測図

第3号溝 (第52図)

調査区の北西端付近イ〜エー2〜3グリッドに位置する。西側が調査区域外となり、東側は第1、2号堀と切り合うが、本跡のほうが古い。東端も第1号堀内で消失しており、全容は不明であるが、東西に直線的に延びる溝である。検出部分での規模は、長さ10m余り、幅0.8〜1.5m、深さ0.5〜0.9mを測る。形態は中央部で溝幅が狭くなり、底部はやや浅くなっている。その西側は深くなっており、中層部で広範囲にわたり焼土層が検出された。壁はやや傾斜をもち緩やかに掘り込まれ、底面はU字形に近い。遺物は西端から土師器の小片2点のみ出土した。



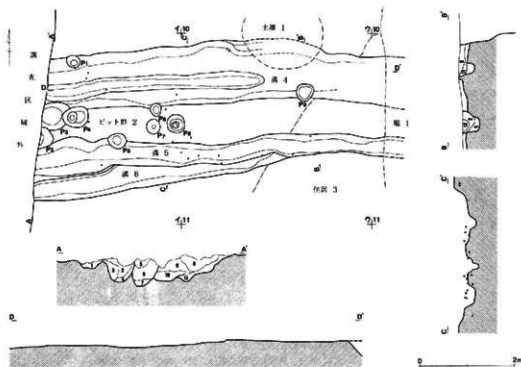
土層註

1. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子を多量に含む。粘性あり。しまり良。
2. 黒褐色土 黄褐色粘土粒子を少量含む。焼土を全体的に多量に含む。粘性、しまりともに強。
3. 黒褐色土 黄褐色粘土粒子を少量含む。粘性、しまりともに強。
4. 黒褐色土 黄褐色粘土粒子を多量に含む。間ブロックも含む。粘性、しまりともに強。

第52図 第3号溝実測図及び遺物出土位置図

第4・5・6号溝 (第53図)

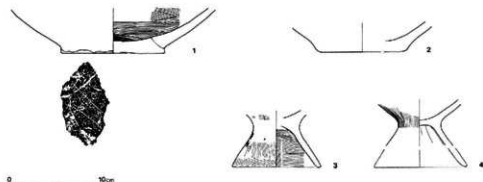
調査区南西寄りア〜ウー10グリッドに位置する。いずれも西側は調査区域外となり、東側は第3号住居跡と切り合うが本跡のほうが新しい。また溝4・5は東端が第1号堀によって破壊され、堀中で消失しており、溝4は更に第1号土塀の破壊を受けている。溝6は溝5と切り合い消失している。両端が不明で全容は把握し難いが、いずれも東西に直線的に延びる溝である。検出部分の規模では、溝4は長さ7.1m、幅1.0~1.3m、深さ17~44cmを測り、溝5は7.3m、幅0.4~0.8m、深さ24~47cmを測り、溝6は長さ5.3m、幅0.4~0.6m、深さ5~18cmを測る。いずれも床面は若干の高低差がみられ、壁面は傾斜をもって緩やかに掘り込まれている。また、三溝の周囲には9本のビットが検出されたが、溝との関係は掴めなかった。出土遺物は21点と少なく、第4号溝の壺形土器の底部(№1, 2)、台付壺形土器の脚台部(№3, 4)を図示したが、第5・6号溝についてはいずれも小片のみで図示し得るものはない。



土層註

1. 明褐色土 黄褐色粘土粒子を多量に含む。粘性あり。しまり弱。
2. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子を少量含む。粘性あり。しまり良。
3. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子を多量に含む。粘性あり。しまり良。
4. 黒褐色土 黄褐色粘土粒子を多量に含む。粘性あり。しまり強。
5. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子を微量含む。灰褐色地を少量含む。粘性あり。しまり良。
6. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子を一般に少量含む。焼土粒子を微量含む。粘性あり。しまり良。
7. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子を多量に含む。焼土粒子を微量含む。粘性あり。しまり良。
8. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子を少量、焼土粒子を微量含む。灰色土ブロックを含む。
9. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子、同ブロックを少量含む。灰色土を少量含む。粘性あり。しまり良。
10. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子を少量含む。同ブロックを多量に含む。
11. 黒褐色土 黄褐色粘土粒子、同ブロックを多量に含む。焼土粒子を微量含む。しまり強。
12. 明褐色土 黄褐色粘土粒子を少量含む。粘性弱。しまり弱。

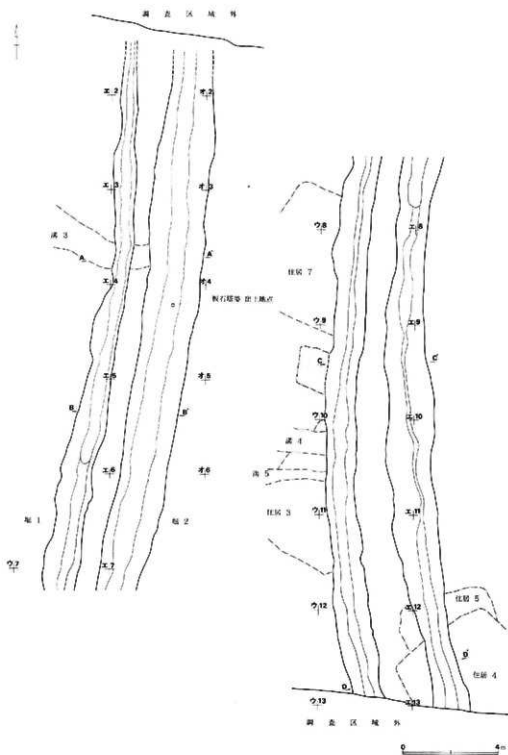
第53図 第4・5・6号溝・第2号ビット群実測図及び遺物出土位置図



第54図 第4号溝出土遺物実測図

第25表 第4号溝出土遺物 (第54図)

番号	器 種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
1	壺	底径 (10.8)	大型で平底の底部。胴部は、底部から微妙に内彎しながら大きく開く。外面、ナデ調整。器面が軟弱な状態で調整が行われているようで、底部脇に粘土がはみ出す。内面は丁寧な刷毛仕上げである。底部外面には木炭痕を残す。底部20%残。	胎土 H微、E少 焼成 普通 色調 淡褐色	
2	壺	底径 (9.4)	平底の底部。胴部は、底部より直線的に開く。内外面ともにナデ調整。底部10%残。	胎土 A微、H少 焼成 良好 色調 淡褐色	
3	台付甕	胴径 (9.2)	接合部から直線的に開き、裾部で僅かに内彎する脚台部。外面、縦方向の刷毛整形、裾部では斜方向の調整を加える。内面、横方向の丁寧な刷毛整形。脚台部30%残。	胎土 EFH微 焼成 普通 色調 暗橙褐色	
4	台付甕		接合部。外面、刷毛整形後、脚台部はナデ調整を加える。内面、底部はナデ、脚台部はヘラナデ後ナデ調整。接合部80%残。	胎土 A.H微 焼成 普通 色調 茶褐色	

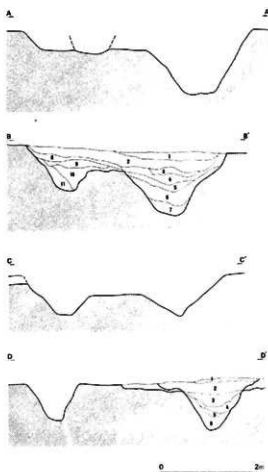


第55图 第1・2号掘実测图(1)

(4) 堀と出土遺物

第1号堀 (第55・56図)

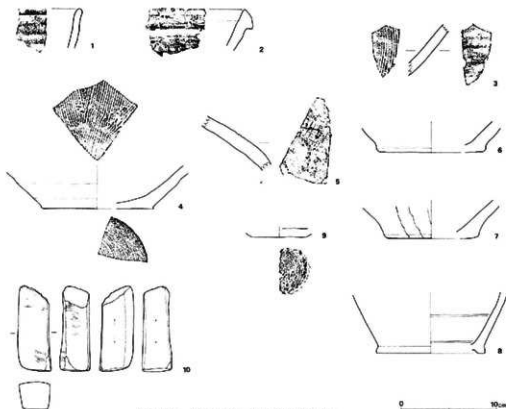
調査区の中央を南北に縦断し、東側の第2号堀と平行にはほぼ直線的に延びている。ウーエー1～12グリッドにわたって位置し、南側で調査区域外に至る。北寄りで第3号溝、中央で第7号住居跡を、南寄りで第3号住居跡及び第4・5・6号溝をそれぞれ破壊して構築されている。形態は南側ほど幅が広くなり、深さも南側の方が深くなっている。規模は、検出部分で長さ約45m、幅約0.5～1.6m、深さ約0.2～1.2mを測る。壁はやや傾斜をもち緩やかに堀り込まれる。底面は南側で幅広の薬研、中央でU字形、中央から北側にかけては平坦である。出土遺物はいずれも須恵器や中世陶器の破片、砥石等である。



第56図 第1・2号堀実測図(2)

土 層 註

1. 灰褐色土 黄褐色粘土粒子をまばらに微量含む。粘性、しまりともに弱。
2. 灰褐色土 黄褐色粘土粒子を微量含む。灰白色粘土粒子を多量に含む。粘性、しまりともに弱。
3. 灰褐色土 黄褐色粘土粒子を微量含む。灰白色粘土粒子を多量に含む。粘性、しまりともに弱。
4. 灰褐色土 黄褐色粘土粒子、黄褐色粘土ブロック、灰白色粘土粒子を少量含む。粘性、しまりともに弱。
5. 暗灰褐色土 黄褐色粘土粒子、灰白色粘土粒子を多量に含む。黄褐色粒子をやや多く含む。粘性あり。しまり強。
6. 暗灰褐色土 黄褐色粘土粒子、灰白色粘土粒子、茶褐色粒子を多量に含む。粘性あり。しまり強。
7. 暗灰褐色土 黄褐色粘土ブロックを多量に含む。粘性あり。しまり強。
8. 灰褐色土 黄褐色粘土粒子、灰白色粘土粒子を少量含む。粘性、しまりともに弱。
9. 灰褐色土 黄褐色粘土粒子、灰白色粘土粒子、黄褐色粘土ブロックを多量に含む。粘性あり。しまり強。
10. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子、灰白色粘土粒子を少量含む。粘性あり。しまり強。
11. 暗褐色土 黄褐色粘土粒子、灰白色粘土粒子を多量に含む。粘性あり。しまり強。



第57図 第1号掘出土遺物実測図

第26表 第1号掘出土遺物 (1) (第57図)

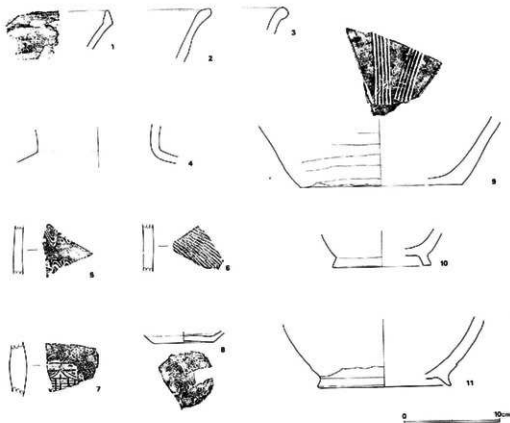
番号	器種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
1	鉢		古瀬戸。鉢の口縁部片。灰釉を施す。口縁端部がやや外傾する。	胎土 A 微、H (細) 少 焼成 良好 色調 淡茶褐色	
2	甕	口径 (24.4)	須恵器。甕の口縁部片。端部は折り返えす。直線のやや内彎気味に外傾し立ち上がる。	胎土 A 微、F H (細) 少 焼成 普通 色調 淡灰色	
3	細鉢		瀬戸美濃系。細鉢の胴部片。轆轤整形で内外面に鉄釉を施す。轆目は現状で8本確認できる。	胎土 H 微 焼成 良好 色調 淡茶褐色	
4	細鉢	底径 (11.8)	瀬戸美濃系。細鉢の底部片。轆轤整形で内外面に鉄釉を施す。轆目は12本単位。底部に回転糸切り痕を残す。底部30%残。	胎土 A 微、H (細) 少 焼成 極微 色調 淡茶褐色	

第27表 第1号堀出土遺物 (2)

番号	器 類	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・旋成・色調	備 考
5	甕		常滑系。甕の胴肩部片。格子状の押印があり、自然釉がかかる。	胎土 F少、H多 旋成 堅緻 色調 淡灰褐色	
6	甕	底径 (11.0)	常滑系。甕の底部。底部10%残。	胎土 F H多 旋成 良好 色調 濃灰褐色	
7	甕	底径 (10.0)	常滑系。甕の底部。外面に縦方向のナデ整形痕を残す。内面は丁寧な調整が施される。底部20%残。	胎土 H(細)少、F多 旋成 色調 濃灰褐色	
8	甕	高台径(11.4)	須恵器。甕の底部。高台の幅は約 0.8cmで、若干「ハ」の字状に開く。胴下半部及び底部30%残。	胎土 H(細)少、F多 旋成 堅緻 色調 濃茶褐色	
9	坏	底径 (5.6)	須恵器。坏の底部。底面に回転糸切り痕を残す。底部45%残。	胎土 F H(細) 少 旋成 堅緻 色調 青灰色	
10	砥石	長さ (8.9) 幅 3.2 厚さ 2.9 重さ 135g	表裏側面の4面が平直となり、砥ぎ面を形成する。2面に断面V字形の鋭いキズを多数残す。上面を欠損するが、火熱を受けて黒く焦けている。	材質 砂岩 色調 黄茶褐色	

第2号堀 (第55・56図)

西隣の第1号と平行して調査区の中央を南北に縦断し、ほぼ直線的に延びている。ウ～オー1～13グリッドにわたって位置し、南側で調査区域外に至り、北端も第1号堀同様区域外に至るものと推測する。北部で第3号溝を、南端付近で第4・5号住居跡をそれぞれ破壊している。形態は中央及び南端部で幅が狭くなり、北側及び南端付近で深度を増す。規模は検出部分で長さ約45m、幅約1.0～2.4m、深さ0.5～1.3mを測る。壁はやや傾斜をもち緩やかに掘り込まれる。底面は南側で薬研または箱薬研、北側は幅広の緩やかなU字形を成す。出土遺物は、いずれも須恵器や中世陶器等の破片で完形に近い遺物はない。なお、北側ユー4グリッドの第6層暗灰褐色土層中より板石塔婆が出土している。



第58図 第2号堀出土遺物実測図

第28表 第2号堀出土板石塔婆 (第59図)



第59図 第2号堀出土板石塔婆拓影図

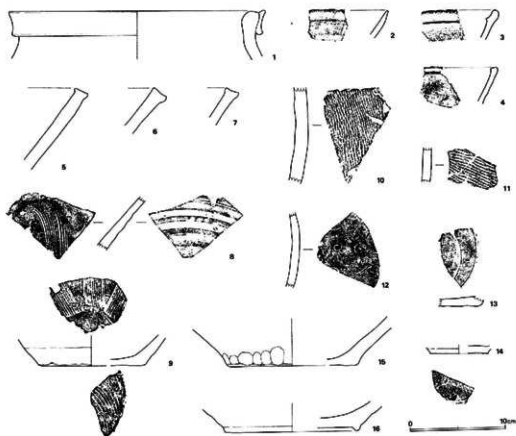
大きさ (cm)	特 徴
現 高 15.6	阿弥陀如来を主尊とする。頂部は山形となり、2条線が切りこまれる。種子はヤリクが廻り込まれるが、その下部を欠損する。石質は緑泥片岩。
幅 15.8	
厚さ 1.9	

第29表 第2号堀出土遺物 (第58図)

番号	器 種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
1	播 鉢		束播系カ。須恵質の播鉢、口縁部片。口縁部は屈曲し、内傾する。	胎土 F散、H(細)少 焼成 普通 色調 淡灰褐色	
2	片口鉢		山茶碗系。片口鉢の口縁部片。端部は僅かに外傾し、肥厚する。	胎土 AF散、H(細)多 焼成 堅緻 色調 淡灰褐色	
3	片口鉢		山茶碗系。片口鉢の口縁部片。端部は外傾に充てく肥厚する。	胎土 AF散、H(細)多 焼成 堅緻 色調 淡灰褐色	
4	甕		須恵器。甕の頸部。頸部10%残。	胎土 A散、FH(細)少 焼成 良好 色調 青灰色	
5	甕		須恵器。甕の頸部。3本1単位の櫛描波状文が施され、現状で2段確認できる。	胎土 FH(細) 少 焼成 堅緻 色調 濃灰褐色	
6	甕		須恵質の甕。胴部片。外面に平行のタタキ整形痕が見られる。	胎土 FH(細) 少 焼成 良好 色調 淡青灰色	
7	甕	底径 (10.0)	常滑系。甕の底部片。外面に押圧あり。	胎土 FH(細) 少 焼成 堅緻 色調 灰褐色	
8	杯	底径 (6.3)	須恵器。杯の底部。底面に回転糸切り痕を残す。比較的薄いつくりである。底部80%残。	胎土 白色針状鉱物散 FH(細) 少 焼成 堅緻 色調 淡灰褐色	
9	播 鉢	底径 (17.0)	須恵質の播鉢。底部片。轆轤整形。櫛目を5本単位とし、等間隔に底を中心としてくっきりと施す。底部は平坦で、器厚は7mmと薄いつくりとなる。底部30%残。	胎土 H(細) 多 焼成 良好 色調 淡灰褐色	
10	長頸壺	高台径(10.4)	須恵器。長頸壺の底部片。底面に幅8mmの高台が貼付けられる。高台は「ハ」字状となる。底部15%残。	胎土 H(細) 少 焼成 堅緻 色調 灰褐色	
11	甕	高台径(14.0)	山茶碗系。甕の底部。高台を有し、「ハ」の字状に開く。全体的に粗雑なつくりである。底部30%残。	胎土 FH多 焼成 不良 色調 灰褐色	

第3号堀 (第48図)

調査区中央東側カー7～11グリッドに位置する。北と南の両側が鈍角に屈曲し調査区域外に至り、北側で第9号住居跡を破壊している。両端が区域外となるため、全容は把握できないが、東側を主体とするようである。形態は中ほど堀幅が広がり、深度を若干減ずる。規模は検出部分で長さ18m余り、幅約0.9～2.0m、深さ約0.6～0.9mを測る。壁はやや傾斜をもち緩やかに掘り込まれ、底面はU字形をしている。出土遺物は、須恵器や中世陶器等の破片である。



第60図 第3号堀出土遺物実測図

第30表 第3号堀出土遺物 (I) (第608図)

番号	器 種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
1	甕	口径 (26.8)	常滑系。甕の口縁部片。口縁を折り返し、頸部に密着した幅約2cmの縁帯を作り出す。口縁部10%残。	胎土 F H (細) 多 焼成 良好 色調 灰褐色	
2	平 碗	口径 (14.6)	灰釉平碗の口縁部片。端部はうすくなり尖る。	胎土 H (細) 少 焼成 良好 色調 淡茶褐色	
3	盤		古瀬戸。盤の口縁部片。灰釉を施す。口縁直下約1.2cmの部分に、かえり状の突起を作り出す。	胎土 F 微、H (細) 少 焼成 良好 色調 淡茶褐色	
4	盤		古瀬戸。盤の口縁部片。灰釉。口縁端部の内側に突起を作り出す。	胎土 F H (細) 微 焼成 良好 色調 淡灰褐色	
5	片口鉢		常滑系。片口鉢の口縁部片。縁部に平面をつくる。小片のため節目は確認できない。	胎土 F H (細) 少 焼成 良好 色調 濃茶褐色	
6	片口鉢		常滑系。片口鉢の口縁部片。端部は平坦となり外側に粘土がはみ出す。外面はやや粗雑な仕上げであるが、内面は丁寧である。	胎土 F 微、H 少 焼成 良好 色調 橙褐色	
7	片口鉢		常滑系。片口鉢の口縁部片。端部は平坦となる	胎土 F H 少 焼成 堅緻 色調 茶褐色	
8	掻 鉢		瀬戸英濃系。掻鉢の胴部片。縦縞整形で内外面に薄い鉄釉を施す。横目は12本単位とする。	胎土 H (細) 少 焼成 良好 色調 淡茶褐色	
9	掻 鉢	底径 (11.4)	掻鉢の底部片。縦縞整形で内外面ともに薄い鉄釉を施す。横目は10本単位とする。底面には回転糸切り痕を残す。底部20%残。	胎土 H (細) 少 焼成 良好 色調 淡茶褐色	
10	甕		須恵質の甕。胴部片。外面は平行のタタヤ整形。	胎土 F 微、H (細) 少 焼成 普通 色調 淡灰褐色	
11	甕		須恵質の甕。胴部片。外面は平行のタタヤ整形。	胎土 H (細) 少 焼成 良好 色調 淡灰色	
12	瓶 子		古瀬戸。瓶子の胴部片。外面には「印花文」を施文し、灰釉を施す。	胎土 H (細) 微 焼成 良好 色調 淡灰褐色	

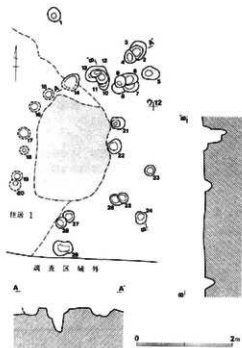
第31表 第3号掘出土遺物 (2)

番号	器 種	大 き さ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
13	瓶 子	底径 (11.6)	古瀬戸。瓶子の底部片。内面にヘラナデ整形痕を残す。あるいは「筒形容器」の底部か。底部25%残。	胎土 F 微、H 少 焼成 良好 色調 淡灰褐色	
14	環	底径 (6.0)	須恵器。環の底部片。底面に回転糸切り痕を残す。底部30%残。	胎土 FH (細) 少 焼成 堅緻 色調 灰褐色	
15	甕	底径 (13.8)	常滑系。甕の底部。外面には指頭による整形痕を残す。内面は磨耗しており、鉢として転用された可能性も考えられる。底部30%残。	胎土 A 微、FH (細) 少 焼成 普通 色調 淡茶褐色	
16	片口鉢	高台径 (7.0)	山茶碗系。片口鉢の底部片。高台は短く「ハ」の字状となる。全体的に粗い仕上げである。底部35%残。	胎土 FH 少 焼成 普通 色調 淡灰褐色	

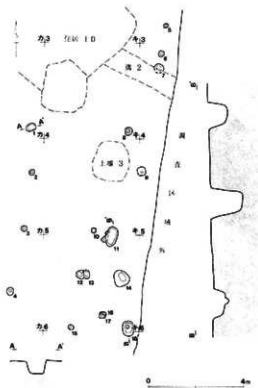
(5) その他の遺構と出土遺物

(第53・61・62図)

調査区の南西及び北東部分に3箇所のピット群が検出された。ここでは、ピットのまともりごとに群として掲載した。南西の第1号住居跡付近を第1ピット群、第4・5・6号溝付近を第2ピット群、そして第9号住居跡北側を第3ピット群と呼称する。各ピット群とも規模及び形態については、第31・32表に記したとおりである。各ピットの関連性から掘立柱建物の存在も考えたが、配置や規模、深度など一連性に欠けるため無理に遺構として取り上げなかった。なお、ピットに伴う遺物は検出できなかった。



第61図 第1号ピット群実測図



第62図 第3号ピット群実測図

第32表 ビット一覧表 (1)

第1号ビット群

番 号	グリッド	形 態	長軸	短軸	深さ	底 面 形	備 考
1	イー11	楕 円 形	30	27	19	凹 状	
2	イー11	楕 円 形	39	33	(7)	不 明	
3	イー11	不整楕円形	(35)	27	15	フラット	
4	イー11	不整楕円形	28	23	16	凹 状	
5	イ・ウー11	不整楕円形	37	27	23	凹 状	
6	イー11	楕 円 形	(40)	24	14	フラット	
7	イー11	楕 円 形	33	(25)	10	フラット	
8	イー11	不整楕円形	(30)	24	9	不 明	
9	イー11	不 整 円 形	25	23	30	凹 状	
10	イー11	楕 円 形	(40)	23	9	フラット	
11	イー11	不整楕円形	(30)	24	38	フラット	
12	イー11	楕 円 形	23	15	49	凹 状	
13	イー11	不整楕円形	46	32	26	凹 状	
14	イー11	不整楕円形	(40)	(30)	15	フラット	
15	イー11	円 形	(22)	(22)	7	フラット	
16	イー11・12	不 整 円 形	(23)	(20)	7	フラット	
17	イー12	円 形	(26)	(24)	7	フラット	
18	イー12	円 形	(19)	(17)	6	凹 状	
19	イー12	円 形	(22)	(20)	11	凹 状	
20	イー12	円 形	(24)	(23)	11	凹 状	
21	イー12	不 整 円 形	23	28	14	凹 状	
22	イー12	不 整 円 形	32	29	19	フラット	
23	イ・ウー12	円 形	22	22	18	フラット	
24	イー12	不 整 円 形	25	23	19	凹 状	
25	イー12	楕 円 形	23	19	11	凹 状	
26	イー12	楕 円 形	(30)	20	10	フラット	
27	イー12	不整楕円形	25	22	12	凹 状	
28	イー12	楕 円 形	23	21	17	凹 状	
29	イー12	不整楕円形	40	24	21	フラット	

第33表 ビット一覧表 (2)

第2号ビット群

番 号	グリッド	形 態	長軸	短軸	深さ	底 面 形	備 考
1	ア-10	楕 円 形	29	24	22	凹 状	
2	ア-10	不 明	46	()	13	凹 状	
3	ア-10	楕 円 形	(70)	58	17	フラット	
4	ア-10	楕 円 形	53	44	35	凹 状	
5	ア-10	楕 円 形	39	32	26	フラット	
6	ア-10	楕 円 形	27	24	22	フラット	
7	ア-10	円 形	29	29	13	凹 状	
8	ア・イー-10	円 形	38	36	31	凹 状	
9	イー-10	不整円形	37	36	21	フラット	

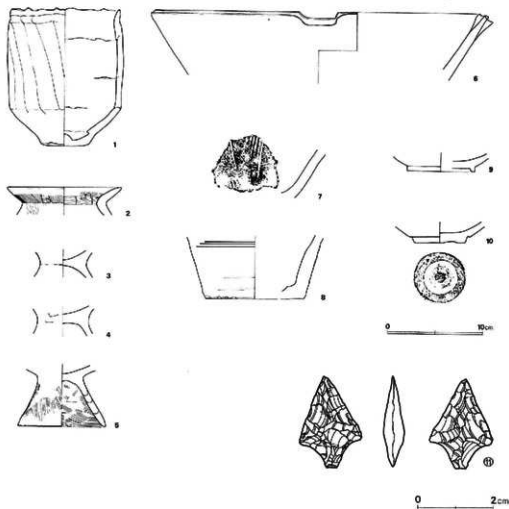
第3号ビット群

番 号	グリッド	形 態	長軸	短軸	深さ	底 面 形	備 考
1	オー3	楕 円 形	42	30	15	フラット	
2	オー4	楕 円 形	26	21	12	凹 状	
3	オー4	円 形	25	24	33	凹 状	
4	オー5	楕 円 形	34	28	25	凹 状	
5	キー2	楕 円 形	23	18	22	凹 状	
6	キー3	楕 円 形	26	23	24	フラット	
7	キー3	(円 形)	41	(39)	20	凹 状	
8	カー3	不整円形	34	31	21	凹 状	
9	カ・キー4	不整円形	36	24	40	凹 状	
10	カー4	楕 円 形	24	21	25	フラット	
11	カー4・5	楕 円 形	85	46	41	フラット	
12	カー5	不整円形	36	(36)	23	凹 状	
13	カー5	楕 円 形	37	26	25	フラット	
14	カー5	不整円形	69	67	66	フラット	
15	カー5	楕 円 形	23	20	17	フラット	
16	カー5	楕 円 形	27	18	20	フラット	
17	カー5	不整楕円形	27	20	20	凹 状	
18	カー5・6	楕 円 形	64	46	27	凹 状	

(6) グリッド出土の遺物 (第63図)

遺構の伴わない遺物としてグリッド単位で取り上げたものである。いずれも、遺物包含層である第2層の暗褐色土層中や遺構の覆土の上層から出土したものである。

出土遺物の1～5は、古墳時代の壺型土器及び甕型土器、台付甕型土器の破片である。6～11は、中世陶器片。12は、石鏃で黒曜石製である。古墳時代の土師器は第6・7号住居跡付近や堀の上層から出土している。住居跡に伴うものであろうか。



第63図 グリッド出土遺物実測図

第34表 グリッド出土遺物 (第63図)

番号	器 種	大きさ (cm)	形態・手法の特徴	胎土・焼成・色調	備 考
1	壺	口径 (11.5) 胴径 (12.2) 底径 5.1 器高 14.5	口縁部及び胴部は径をほぼ同じくし、筒状の形態をとる。底部は小さく収縮し、平底。口縁部は、つまみ出すように僅かに外傾する。外面、器表面が軟らかい状態での調整と思われるが、縦方向のヘラナデを施す。内面は、ナデ調整。3箇所の輪痕を残す。全体的にもろい仕上げである。残存、70%。底部は完存。	胎土 A微、H多 焼成 普通 色調 淡橙褐色	
2	甕	口径 (12.0)	「く」の字状に屈曲する小型の甕の頸部及び口縁部。外面、縦方向の刷毛整形。内面、横方向の刷毛整形。内外面ともに口縁部に横ナデを加える。口縁部10%残。	胎土 A微、FGH少 焼成 普通 色調 橙褐色	
3	台付甕		接合部。内外面ともにナデ調整。外面に煤が付着する。接合部80%残。	胎土 AD微、F H少 焼成 普通 色調 淡橙褐色	
4	台付甕		接合部。内外面ともにナデ調整。外面にヘラナデ調整痕を残す。接合部90%残。	胎土 A微、FGH少 焼成 普通 色調 淡橙褐色	
5	台付甕	脚径 9.2	直線的に開く脚台部。内外面ともに刷毛整形。脚台部内面に3段の輪痕を残す。甕部内面及び脚台部外面に煤が付着する。脚台部はほぼ完存。	胎土 FH多 焼成 普通 色調 淡橙褐色	
6	片口鉢	口径 (35.4)	常滑系。片口鉢の口縁部片。端部は若干凹が平坦面となり、幅 3.5cmの注口を作り出す。内外面ともに薄い鉄釉を施す。口縁部30%残。	胎土 F少、H(細)多 焼成 堅緻 色調 濃茶褐色	
7	細 鉢		瓦質の細鉢。胴下半部片。欄目は現状で6本確認できる。	胎土 A微、DEH少 焼成 やや不良 色調 淡灰色	
8	三筋甕	底径 (10.3)	常滑系。三筋甕の胴下半及び底部片。最下段の筋が3条確認できる。破損上半部の割れ口には円形状の摩耗痕が見られる。機能は分からないが転用の可能性があり。底部30%残。	胎土 H(細)多 焼成 堅緻 色調 淡灰褐色	
9	杯	高台器(7.1)	鎮西窯の灰釉陶器。底部片。幅5mmの高台を附す。内面に灰釉を施す。底部20%残。	胎土 FH(細)少 焼成 良好 色調 淡灰褐色	
10	碗	高台径(5.2)	古瀬戸。灰釉平碗の底部片。回転糸切り後、中央部を削り出し高台とする。底部90%残。	胎土 F微、H(細)少 焼成 堅緻 色調 淡灰褐色	
11	石 鐘	長さ 2.4 幅 1.7 厚さ 0.5	有基石鐘。表裏から入念に押圧を加え、刃部を作り出す。完存。	石質 黒曜石	

6 結 語

南原遺跡は、荒川（旧入間川）の左岸に立地した古墳時代前期、中期、後期、平安時代、さらに中世の遺構や遺物を検出する遺跡である。今回の調査で第5次を数え、集落の範囲が東側へ大きく拡大されることとなった。時代がわかる遺構としては、古墳時代前期の住居跡11軒（第1～11号住居跡）、土壇1基（第2号土壇）、溝3本（第1・2・6号溝）、中世の堀3本（第1～3号堀）である。他の第1・3号土壇及び第3・4・5号溝、ピット群については伴う遺物が検出されていないため時間的な位置付けはできなかった。

以下では、最も多く検出されている古墳時代前期の住居跡と中世の堀についてまとめておきたい。

1 古墳時代前期の住居跡について

第5次調査においては11軒の住居跡を検出した。いずれも古墳時代前期の五領期に位置付けられるもので、第11号住居跡がやや後出するものの、時期をほぼ同じくするものである。ここでは、検出した住居跡の形態や規模等について比較をしてまとめておきたい。ただし、遺構の重複や破壊などにより、全容がわからず推定のもとなるものもある。

まず、住居跡の形態であるが、方形（第1・2・6号住居跡）、隅丸方形（第5・8・10号住居跡）、長方形（第3・4・9号住居跡）の3形態となり、コーナーの形が異なるが方形を呈するものが多くなるようである。

次に、規模であるが、第64図のとおり比較をおこなった。規模は一辺が3.6mから6.0mの範囲となっている。また、面積からすると13.2㎡から33.6㎡のところに分布する。平均面積は22.6㎡で、平均規模は一辺が4.75mを測る。面積からすると約20㎡程のひらきがあり、第1・4・9号住居跡がやや大型となるが、全体的に中規模域に位置付けられるものであろう。ここで、便宜上3つに分類しておく。

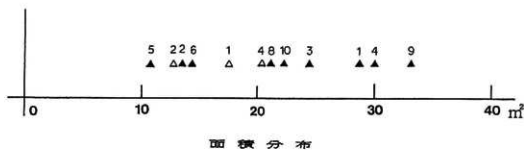
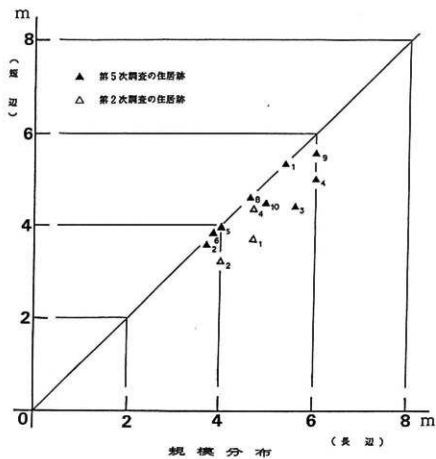
大型（29.16㎡～33.60㎡） 第1・4・9号住居跡

中型（21.16㎡～24.64㎡） 第3・8・10号住居跡

小型（13.32㎡～14.44㎡） 第2・5・6号住居跡

なお、第64図は第2次調査（A地区）で検出されている3軒の住居跡を加えたものである。だが、第11号住居跡及び第2次調査において検出されている第3号住居跡は、長辺、短辺ともに推定となるため、この図や分類には含めていない。面積を推定すると、前者は45.0㎡、後者は41.0㎡となり、この中では傑出した大きな住居跡になるようである。

ところで、周辺遺跡の状況であるが、鍛冶谷・新田口遺跡において39軒の住居跡が検出されている（註1）。規模については、大型、中型A、中型B、小型に分類（註2）されており、小型のものでは4.0㎡から大型のものでは49.0㎡のものまで検出されている。どの規模においても偏りがない検出状況であるが、面積が14.3㎡～19.3㎡の中型B類に属するものが最も多くなるようである。



第64図 住居跡比較図

さらに、炉跡と柱穴について若干ふれておきたい。炉跡は、住居跡の床面において継続的に熱が加えられたと思われる場所とした。今回の調査では、炉跡が検出できたのは第9号及び第10号住居跡の2軒であった。前者は中央やや西側（短辺）より、後者は中央やや北東より検出された。第2・9・10号住居跡に主柱穴を構成する掘り込みが、コーナーを基本に見いだすことができた。けれども、他の住居跡は、柱穴はあるものの位置が規定されておらず、掘り込みの浅いものや形が整っていないものもあり、不安定な状況である。

このようなことから、南原遺跡における古墳時代前期の住居跡をまとめると、形態的には方形（あるいは隅丸方形）で、鍛冶谷・新田口遺跡と同じように中規模のものが主体となるようである。また、形態と規模の関係においては、比較的大型の住居は長方形となる傾向があり、中型と小型の住居は整った方形（あるいは隅丸方形）プランをとるようである。さらに、それらと炉跡との関係については、長方形を呈する第9号住居跡についていえば、中央でやや短辺よりの位置となる。だが、長方形、正方形ともに1例であり、他の住居跡には見られないのが残念である。

いずれにしても、全体的には、第9・10号住居跡は比較的はっきりとした構築状況であるが、他の住居跡についてはやや簡易的な感じを受けた。柱穴の位置を考えると住居の形態等について疑問が残るものもある。

以上であるが、現在の状況では15例という僅少なものである。今後、資料の増加を期待する。

2 中世の遺構について

当調査区から堀を3本検出した。第1号堀と第2号堀は並行して構築されており、さらに南方向に伸びるものである。第3号堀は西側の一部分が検出されているに過ぎず確かな形態はつかめないが、さらに東側に広がるようである。

さて、各堀の時期であるが、僅かであるが検出された遺物から推定すると、次のようである。第1号堀からは古瀬戸の鉢。常滑系の甕。瀬戸美濃系の描鉢が出土している。14世紀に比定（註3）される。第2号堀からは常滑系の甕。東播系の描鉢。山茶碗系の甕、片口鉢が出土している。13世紀後半から14世紀に比定。さらに古く11世紀から12世紀に位置付けられる長頸壺、櫛溝波状文をもつ甕の破片も出土している。しかし、下層部である第6層から阿弥陀如来を主尊とする板石塔婆が出土しており、比較的に早い時期に埋没したものと思われ中世の遺構として捉えたい。第3号堀からは古瀬戸の壺、瓶子。瀬戸美濃系の描鉢。常滑系の甕、片口鉢。山茶碗系の片口鉢が出土している。13世紀末から15世紀に比定される。この他に須恵器の甕、杯。須恵質の描鉢、甕が出土しているが、製作年代、生産地等は小片のため不明である。各堀とも出土遺物から13世紀後半から14世紀、15世紀に存在したようである。

ところで、この時期には桃井播磨守直常の子中務小輔直和の戸田居住説がある。それは、「戸田御所」、「戸田城」、「ものい屋敷」、「百の井屋敷」等の名称とともに伝承されてきている。その所在地については、未だ限定されていないのが現状であるが、南原遺跡はその一つに上げられているところで

ある。この桃井氏は、戸田において上戸田の多福院や海禅寺、新曾の観音寺の開基としてそれぞれの縁起や由緒書に見える。埼玉叢書第6巻に収録されている「足立戸田氷川神社并多福院縁起」によると戸田城主として、永徳2年(1382)に武運長久と繁盛を願って大宮の氷川神社を勧請し、同年、別当寺として災難拔除・息災安全を祈って城内に一院を建てたとある。この一院は多福院であるが、『新編武蔵風土記稿』によると「村の南の方、荒川の岸にありしか、洪水を患て後に今の地に移せり云」とあり、現在の地とは異なった場所に位置していたと記されている。このことから南原遺跡がその一つとして想定されて来るところである。

また、第1次から第4次調査を担当された塩野博氏は、第2・3次調査の報文の中で、建物遺構や溝状遺構の検出から「確実に中世初頭(平安時代後期以降)に土豪の館があったことが明らかになってきた。今後は、さらに、周囲をめぐる堀遺構の発見を待ちたい。」とし、館跡の存在の可能性を指摘している。(註4)

このようなことから、南原遺跡を桃井氏館跡と断定はできないが、13世紀後半から15世紀を主体とする土豪の館跡、あるいは寺院跡の存在を考えることができよう。今後、この検出された堀の全体的な広がりや建物跡の存在を明らかにしていくことが課題といえよう。

〔註〕

- 註1 西口正純 「鍛冶谷・新田口遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986
小島清一 「鍛冶谷・新田口遺跡Ⅴ」 戸田市遺跡調査会報告書第2集 戸田市遺跡調査会
1990
- 註2 規模による分類 大型(32.5~49㎡)、中型A(23.5~28.6㎡)、中型B(14.3~19.3㎡)、小型
(4~12.6㎡)。
- 註3 浅野晴樹氏より御教示。第2号堀、第3号堀についても御教示。
- 註4 塩野博・伊藤和彦 「南原遺跡第2・3次発掘調査概要」 戸田市文化財調査報告Ⅴ 戸田市教育委員会 1972

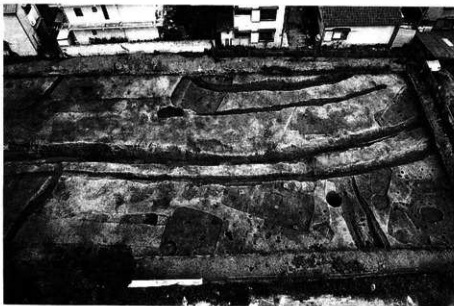
〔参考文献〕

- 赤羽一郎 「常滑焼」 ニューサイエンス社 1984
- 伊藤和彦 「戸田と桃井氏」 備忘録 戸田市郷土博物館研究紀要第4号 1989
- 梅沢太久夫他 「中世寺院跡調査概報(3)」 1991
- 大村 直 「神谷原Ⅰ」 八王子市戸田遺跡調査会 1981
- 同 上 「神谷原Ⅲ」 八王子市戸田遺跡調査会 1982
- 岡田恒三郎 「炭城はどこにあったか」 戸田市教育委員会 1978
- 金井塚良一 「五領遺跡B区の発掘調査」 台地研究№19 台地研究会 1963
- 同 上 「シンボジウム五領式土器について」 台地研究№19 台地研究会 1971
- 塩野 博・伊藤和彦 「南原第1次発掘調査概要」 戸田市文化財調査報告Ⅲ 戸田市教育委員会
1970
- 塩野 博他 「板碑」 戸田市文化財調査報告Ⅳ 戸田市教育委員会 1970

- 塩野 博・伊藤和彦 「前谷遺跡発掘調査概要」 戸田市文化財調査報告書ⅩⅢ 戸田市教育委員会
1978
- 塩野 博 「一荒川下流域における墓制の変遷一 戸田市南原古墳群について」
戸田市立郷土博物館研究紀要第1号 1986
- 同 上 「一荒川下流域における墓制の変遷一 戸田市南原1号古墳の埴輪をめぐって」
戸田市立郷土博物館研究紀要第2号 1987
- 同 上 「南町遺跡Ⅰ」 戸田市遺跡調査会報告書第1集 戸田市遺跡調査会 1987
- 谷井 彪他 「中世城館跡調査概要(3)」埼玉県教育委員会 1985
- 「戸田市史 資料編Ⅰ」 戸田市 1981
- 「戸田市史 通史編上」 戸田市 1986
- 久末康一郎他 「喜多見陣屋遺跡Ⅰ」 喜多見陣屋遺跡調査会調査団編集
世田谷区教育委員会 1989
- 山崎 武 「赤台遺跡」 鴻巣市遺跡調査会報告書第5集 鴻巣市遺跡調査会 1985
- 横川好富 「埼玉県の古式土師器」 埼玉県史研究第10号 埼玉県史編さん室 1983



(1) 南原遺跡Vの位置



(2) 調査区域全景

図版 2



(1) 第1号住居跡（北から）



(2) 第2号住居跡（北から）



(1) 第1号住居跡土器出土状態(第8図-2)



(2) 第2号住居跡土器出土状態(第12図-1)



(3) 第2号住居跡土器出土状態(第12図-3)



(4) 第2号住居跡土器出土状態(第12図-4)

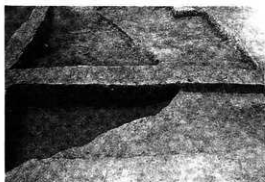


(5) 第3号住居跡(東から)

図版 4



(1) 第4・5号住居跡（北から）



↑(2) 第4・5号住居跡切り合い状態

↓(3) 第4号住居跡土器出土状態(第16図-10)





(1) 第6・7・11号住居跡(西から)



(2) 第11号住居跡土器出土状態(第40図-19)



(3) 第11号住居跡土器出土状態(第39図-9)



(4) 第11号住居跡土器出土状態(第39図-12)

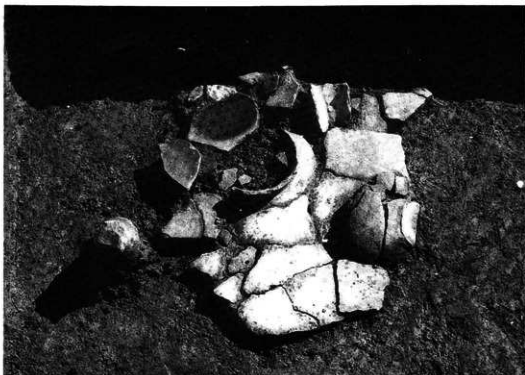


(5) 第8号住居跡土器出土状態(第26図-14)

図版 6



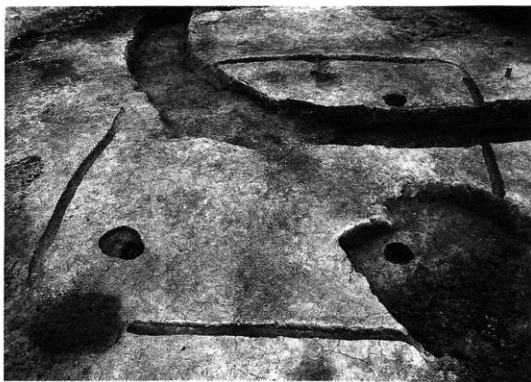
(1) 第8号住居跡（東から）



(2) 第8号住居跡土器出土状態（第24図一1）



(1) 第9号住居跡 (西から)



(2) 第10号住居跡 (南から)

図版 8



(1) 第1号溝(西から)



(2) 第1号溝土層断面(左は第9号住居跡)



↑ (3) 第2号溝(北から)



(4) 第2号溝ガラス小玉出土地点

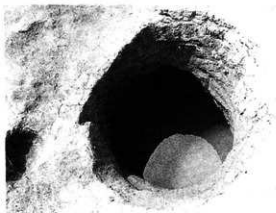


(1) 第3号溝（北から）



(2) 第4・5・6号溝（東から）

图版 10



(1) 第1号土坑



(2) 第2号土坑



(3) 第3号土坑



(1) 第1・2号堀(北から)



(2) 第1号堀



(3) 第2号溝



(4) 第1・2号堀土層断面



(5) 第2号堀板石塔婆出土状態(第59図)

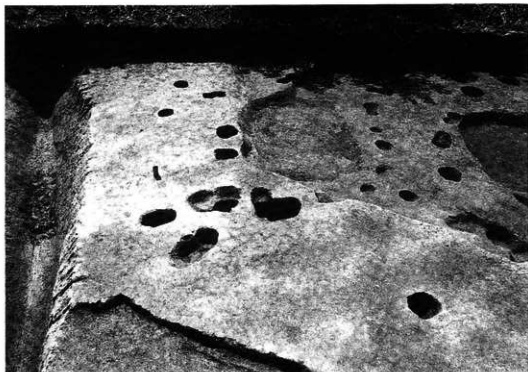
図版 12



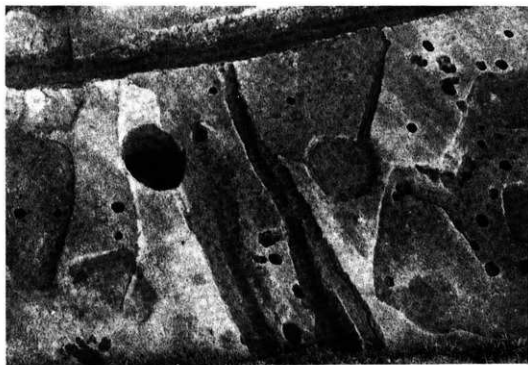
(1) 第3号堀 (北から)



(2) 第3号堀



(1) 第1号ビット群



(2) 第2号ビット群

图版 14



(1) 第1号住居跡出土遺物(第8図-2)



(2) 第2号住居跡出土遺物(第12図-1)



(3) 第2号住居跡出土遺物(第12図-2)



(4) 第2号住居跡出土遺物(第12図-3)



(5) 第2号住居跡出土遺物(第12図-4)



(6) 第1号住居跡出土遺物(第8図-9)



(1) 第2号住居跡出土遺物(第12図-8)



(2) 第2号住居跡出土遺物(第12図-9)



(3) 第4号住居跡出土遺物(第16図-10)



(4) 第4号住居跡出土遺物(第16図-13)



(5) 第7号住居跡出土遺物(第21図-1)



(6) 第6号住居跡出土遺物(第19図-3)

图版 16



(1) 第8号住居跡出土遺物(第24図-1)



底部(木炭痕)



(2) 第8号住居跡出土遺物(第25図-11)



(3) 第8号住居跡出土遺物(第25図-9)



(4) 第8号住居跡出土遺物(第25図-4)



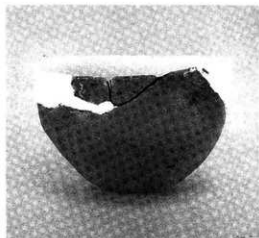
(5) 第8号住居跡出土遺物(第25図-7)



(1) 第8号住居跡出土遺物(第26図-13)



(2) 第8号住居跡出土遺物(第26図-14)



(3) 第8号住居跡出土遺物(第26図-16)



(4) 第9号住居跡出土遺物(第32図-3)



(5) 第9号住居跡出土遺物(第33図-15)



(6) 第9号住居跡出土遺物(第33図-29)

图版 18



(1) 第11号住居跡出土遺物(第39図-9)



(2) 第11号住居跡出土遺物(第40図-18)



(3) 第11号住居跡出土遺物(第39図-11)



(4) 第11号住居跡出土遺物(第40図-19)



(5) 第11号住居跡出土遺物(第40図-27)



(6) 第11号住居跡出土遺物(第40図-26)



(1) 第11号住居跡出土遺物(第39図-12)



(2) 第11号住居跡出土遺物(第40図-32)



(3) 第11号住居跡出土遺物(第39図-15)



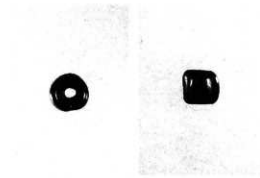
(4) 第11号住居跡出土遺物(第40図-30)



(5) 第2号土壇出土遺物(第45図-5)



(6) 第2号溝出土遺物(第50図-4)

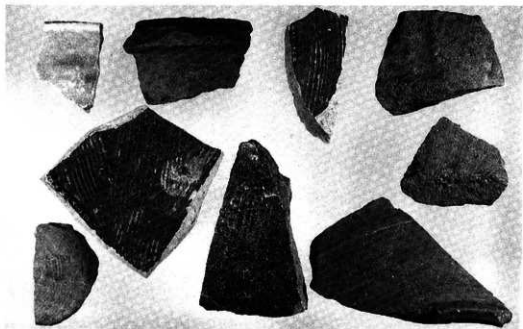


(7) 第2号溝出土ガラス小玉(第51図-8)

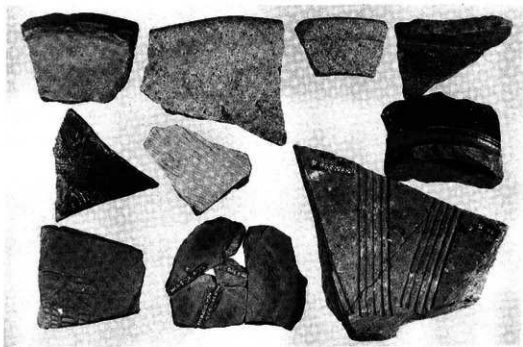


(8) 第4号溝出土遺物(第54図-1)

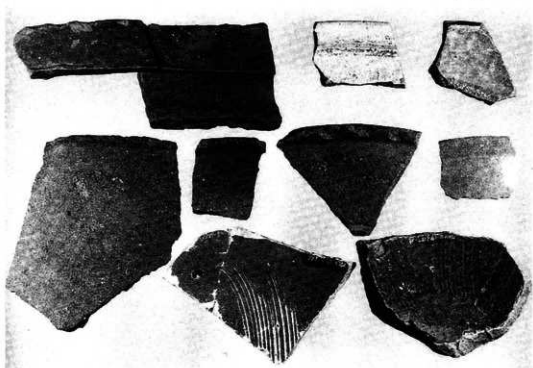
图版 20



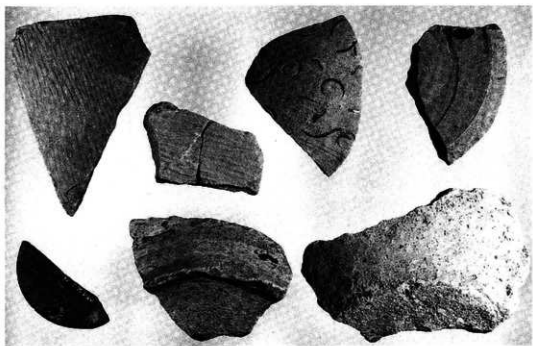
(1) 第1号掘出土遺物(第57図-1~9)



(2) 第2号掘出土遺物(第58図-1~11)

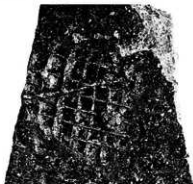


(1) 第3号掘出土遺物 (第60図-1~9)



(2) 第3号掘出土遺物 (第60図-10~16)

图版 22



(1) 第1号掘出土遺物(押印)(第57図-5)



(2) 第2号掘出土遺物(押印)(第58図-7)



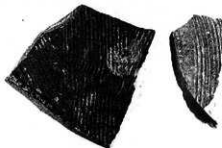
(3) 第2号掘出土遺物(波状文)(第58図-5)



(4) 第3号住居跡出土遺物(印花文)(第60図-12)



(5) 第1号掘出土遺物(第57図-9)



(6) 第1号掘出土遺物(第57図-3・4)



(7) 第2号掘出土遺物(第58図-9)



(8) 第3号掘出土遺物(第60図-8・9)



(2) グリッド出土石鏃
(第63図-11)

(1) 遺構出土石器(左から第57図-10、第33図-30、第45図-11、第40図-35、第16図-14)



(3) 第2号掘出土板石塔婆(第59図)



(4) グリッド出土遺物(第63図-6)



(5) グリッド出土遺物(第63図-1)



(6) グリッド出土遺物(第63図-8)

南 原 遺 跡 V

埼玉県戸田市遺跡調査会報告書 第3集

発行日 平成3年4月12日

発 行 戸 田 市 遺 跡 調 査 会
戸田市上戸田1-18-1
戸田市教育委員会内

印 刷 カ ミ ヤ 印 刷
前和市道場3-14-4

